

南園會報

第三十號



一の井 (月三年四十正大) 生業卒回五第科本



二 其 (月三年四十正大) 生業卒回五第科本



(月三年四十五大) 生業卒回三十第科實

南園會報

第三十號

卷頭

木がらしが吹く。
鉛色の空あひからは
雪降り 霰とぶ。
あゝ、冬のおとづれ！
その威力には
地上のほごんごすべての
樹木の花散り 葉も落ちる。
▽
されど
その根幹のみは
吹きふる風雪に
かたさ つよさをいや増し、
質實の みなりで、
毅然としてあまそゝりたち、
あらんかぎりの力で
根から養分をおくりつゝ、
青い雲を遠く望んでゐる。

(なかの)

教の園

理性に従ふ生活

大正十四年十月十三日戊申詔書奉讀式後講堂に於て齊藤校長の講話せられしものなり。

本科四年生 山本 照
同 杉山 壽美子 筆記

今日は「理性に従ふ生活」といふことに就いてお話しします下學年には少々分り兼ねるか知れませんが、成るべく平易に話す積りだから注意して聴いて下さい。

さて自然界の現象を眺めて見ると、雨が降ったり風が吹いたりする。あれは唯原因結果の法則によつて降ったり晴れたり吹いたり止んだりするのであつて、雨や風自身にはチツトも御存じはない。それに早魃の時に雨が降ると非常に善い雨だと言つて賞めたり、稻の實のる時季に風が吹くと、大層悪い風だといつて誹しつたりする。けれども夫れは人間が考へて居る或る目的に、丁度都合が善かつたり悪かつたりするから言ふので、雨や風夫れ自身には何も農家が困るから雨を降らさうの、腹が立つから風を吹かさうのといふやうな、何か目的を自覺して居る譯ではない。次に動物の活動を見ると、燕が巢を營んだり雛を孵化したり、雌雄同棲したり、蜘蛛が網を張つたり、蜜蜂が蜜を貯へたり、又人間も生れると、直ぐに聲を立て、泣いたり、母親が乳房を含ませると乳を吸

つたりする。是等は決して教育したものでなければ経験したものでない。生れるとから出来る遺傳的能力であつて、全く自然的なものである。之を本能といふのである。本能の働きは自然界の現象と違つて、如何にも目的を自覺してやつて居るかのやうに見ゆるけれども、是も矢張目的を自覺して居るのではない。自覺してはゐないが、併し其の行動は自然と其の目的に適つては居る。目的を自覺しない行動だから、別に方針もなければ計畫もない。唯斯くすれば氣持がよい、斯くしなければ苦しいといふ感じで動くことが多いのである。決して物の道理を考へ善い惡いを判斷し、取捨選擇して行動を決定するといふ働きはないのである。一般動物の行動はすべて是れである。人間でも野蠻未開時代の所謂原始人は丁度他の動物や赤坊のやうに、或る刺激によつて本能的に習慣的にのみ活動したものに違ひない。腹が空いたから食ふ、雨が降り風が吹くから避ける、自分に危害を加へようとする者があるから敵を防ぐといふやうに、自然の働きをして居つたものであらう。併し段々進歩して來ると、同じ活動するならば食ふにしても最も善く食ふにはどうするか、風雨を凌ぐにしてもどうすれば最も都合がよいか、敵を防ぐにしても唯戦ふ計りでなく、有利な武器を作つたり戦術を研究するやうに進んで來たものであらう。斯く進んで來たといふのは唯本能的に習慣的に行動するのみでなくて、豫め自分のする動作の目的を自覺して、其の目的を達するに最も都合のよいやうに、澤山の方法の中から取捨選擇して行動する働があるからである。このやうに人間が習慣的や本能的に活動するのでなくて、反省考慮を費し物事の道理を辨別し取捨選擇する働を理性といふ理性の働きが段々發達して來ると、生活は次第に向上開展して來て益々理性を働かすやうになつて來る。茲に人間の進歩といふものがある。而してこの理性の働きがあるといふことは人間特有の性質であつて、實に人間を他の動物よりも優越なものにする至上の權威である。人は萬物の靈長であるといふのも畢竟この理性の働きがあるからである。

然るに世の中には折角とこの貴い理性の働きを有する人間でありながら慎重に反省考慮もせず、唯本能に支配せられ感情の動くがまゝに行動する人が少くない。其の爲め多くの間違や色々な罪惡や不品行などが起つて來る

腸チブスの治り掛けに、醫師の嚴禁するにも拘らず、盛に起る食慾を制することが出来ないで、口腹の慾を充たした爲めに、終に病氣が再燃して一命を失つた者も少くない。子供のヂレルの聞き様嚇と怒つて打擲したり、制縛したり、したのが當り所が悪くて死に致した母もある。世評を恐れて煩悶の末鐵道往生を遂げた處女もある人に罵られて怨恨の餘りに讒誣中傷をしたり、甚しきは居宅に放火して怨みを晴らさんとしたりした尼さんもある。目的の達成せられないことに失望落膽して自暴自棄に陥つた青年もある。

感情に左右せられる人の行動は兎角中正を失する。感情は一口に言へば快不快の感じである。けれども周囲の事情によつて色々複雑な働きを現はして来る。「人は感情の動物である」杯と申すやうに、何人にも生れることから自然に持つて居る心の働きではあるか、婦人は概して男子よりも感情が強いのである。而して唯強いばかりでない、總ての行動が感情に依つて支配せられようとする傾きがある。感情によつて行動する人は氣の向いた時は熱心にするが、氣に喰はないと取り合ひもしない。善事と知つて居ても決行せず、悪事と知つて居ても爲し遂げるといふやうなことがある。例へば人に對して同情の心が起つても、一旦つまらぬ事で感情を害すると同情どころか、反對に妨害を加へようとするこゝさへある。随つて前には味方であつたものが忽ち敵となり、前には敵であつた者が忽ち味方となるやうなことになる。女同志の親友と稱するものが、時々異動が起ること杯は女子の學校ではよくある事である。斯ういふ人になると、物を好き嫌ひで以て見るから見方が偏して居て黨派心が強くて、色々な仲間や團體を作る氣味がある。何か會を設けても主義で集るのでなくて感情で集るのである。今日の會合には「あの方が出席なさるから自分は缺席しよう」とか「あの方のお説は最もものではあるが、何だかすかないから賛成しない」とかいふことがよくある。けれども出席するのが正當であるならば、厭やでも出席しなければならぬ。他人の説に最もがあるならばたとひ其の人を好かないでも其の説には賛成しなければならぬ。感情の動くがまゝに行動しないで物の道理を能く考へて道理に従つて行動するのが立派な行である。

感情には方向といふものがない、全く盲目的である。而して之に方向を與へるものは理性の力である。夫れ故

理性が加はらないで、唯高調した感情のみで行動すること、なれば色々な危険が伴ふ。その平靜に歸した時、靜かに顧みると自分ながら思慮の餘りに淺かつたことを大に後悔することもあるが、其の時既に遅くて、取り返しが付かない。我が國民は元來感傷的な傾向を有つて居る。それで非常に激し易くて、どうかすると冷靜な判斷を缺くことが屢々ある。近年に於ける事例を顧みて、津田三藏が露國皇太子を斬り付けたるが如き、西野文太郎が森文部大臣を暗殺したるが如き、伊庭想太郎が星亨を殺害したるが如き、其の他李鴻章のヒストル事件、日比谷の焼打事件、米騒動、原首相の暗殺事件、大震災當時鮮人に對する暴行事件、移民問題と米國々旗奪取事件等枚舉に遑がない程である。感情の亢奮に依つて發作的に爆發する行動程恐るべく、又取返しの付かないものはない。

次に女子の最も注意しなければならないことは誘惑に對する態度である。世の中の色々な誘惑は、この盲目的に動き易い性質を以つて居る所の感情を利用して付け入らうとするのである。誘惑といふものは恐ろしい顔付や嚴めしい言葉を用ひるのではない。美しい假面を被り優しい態度や甘い言葉を弄して、我等の弱點に乗じて知らず識らずの間に我等の心を動かさうとするのである。誘惑に侵されたい爲めには、意志の強固なといふことも必要であるが、知慮を明確にするといふことが緊要である。即理性で以て是非善惡を判斷して正當な方向を取つて決して他から乘ぜられないやうにしなければならぬ。年若い女子が男子から故なく話をしかけられたり、又は故なく恩惠を蒙つたり、或は手紙を貰つたりした場合に、父母師長に申出ることもしないで、自惚や好奇心から之に應對したり感謝したり、又は手紙を内室に披いて見たりすると、それは既に墮落の第一歩に踏み込んだやうなものである。況して自分で蜜かに返書を認める如きに至つては、よし其の内容が如何にあらうとも、最早到底救ふ可らざる墮落の淵に陥つたもので、生涯社會の表面に立つことを許されないものであるといふことを覺悟しなければならぬ。

世の中の失敗者を觀ると、大抵は誘惑が原因となつて男女愛の惡用に由る者が多いやうに察せられる。愛とい

ふものは取りも直さず感情であるから盲目的のものである。必ず理性の統制を缺いてはならない。最も神聖な愛と認められて居る母性愛でも、子供の將來のことを考へないで、唯感情にのみ支配せられて實現したならば、所謂溺愛に陥つて仕舞つて子供の前途を害する。子供のネダルが儘にお菓子と與へて胃腸を害せしめたり、萬事に世話を焼き過ぎて、却つて子供の獨立心を阻害したり、遠方に遊學する子供の身の上を心配の餘りに必要以上の學費を給して、却つて我が子の成業を妨げたりしつゝ、ある母が世の中に幾人あるか判らない。旅順陥落の第一將と稱へられた獨眼龍山地元治將軍は、幼時友達と門外に遊び戯れて居た時、何うした機みが、過つて其の一眼を抉り出した。氣丈な元治は其の抉り出した眼球を家に持ち歸つて母に示しながら「お母さん、今遊んで居る中に怪我をして眼球が出ました」と申した。母は流石に打ち驚いたが、愛兒の勇氣を挫いてはならないと思つて「汚いッ捨て、お仕舞ひなさいッ」と言つた。やがて療治を了へて、母は「残念ではあるが、之も災難で致方がない片眼になつたとして氣を落さず確かりと遣つてお呉れ。昔鎌倉權五郎は片眼で、花々しい武者振を現した。お前も權五郎に劣らぬ立派な武士になつてお呉れ。」と言つて、父と共に打ち勵ました。果してあれ丈の武功を立てた勇將となられた。又熊本縣下に湯地龍彦氏の夫人に津尾子といふ古來稀なる賢婦人が居られた。其の長男陣狼七歳の時、自宅より一里程隔りたる人家離れの儒者の所に入門させて、毎日山道を通學せしめて居つたが、途中には田舎のことゝて、山もあり川もあり道とても思ふ程の道でなく、行きかふ人も少く寂しく恐ろしい所であつた。津尾子夫人は兎角世の親達は子供が可愛いが爲めに、却つて其の子の教育を誤ることの多いことを慮り、愛兒の獨立自治の精神を涵養し、我儘な臆病卑屈な習慣の起らないやうにとて毎日陣狼を連れて先生の塾へ行かれるにも、決して子供の手を引き背負ふ杯のことをしないで、子を思ふ切な心を押へつゝ、十間も二十間と後から見え隠れに附いて行かれた。一日お稚古が遅くなつて歸途日が暮れたが、生憎時雨が降り來つて月影も暗く、大人でさへも恐ろしく物凄う思はれる程の晩であつた。陣狼は最初は我慢して何時もの如く母の先へ立つて行つたが、餘りの恐ろしさに「母上近うよつて下さい。」と、側近くすり寄つて來た。母は「そなた大層臆病な子だな

昔戰國の武士は七つ八つで早や敵陣へ送られたと申すことだ。そなたの常々言つて居る牛若丸は、子供の時から鞍馬の山奥で劍法を學ばれた。この位の處が恐ろしい様では我子でないぞ。」と前へ押しやつた。陣狼は涙ながら立つて行つたが、恐ろしさは髪の毛がよ立つやうであつた。程經てザンブと音かして水煙が薄暗い月影にうつた。さてこそしまつた。「陣狼……免してくれ。」と宙を飛んでお母さんが駆けつけて見ると川にはまつたと思つた陣狼は、脇指ぬいて其所の川邊に突立つて身構へして居た。母「怪我はなかつたか」「陣上安心なさい今頼を手取りにしようと思つて取り逃がしましたは残念です。」と夫人は手を拍ち、「天晴れな我が子武士の子だ。」と肩押したで、喜ばれた。生れつき物覺の悪い陣狼はかくまでの母の心盡しもそれ程の甲斐もなく、學問が進まないから夫人は深く之を悲しみ、我が身の心盡しの足らぬ爲めと愈心を固めて、先生の宅に陣狼を連れて行かれては、先生が授けられる讀み聲の籙の外に漏れるまゝ、に、窃に其の側に身を潜めて一々用意の紙に假名にて書き取り、陣狼の覺悟ににくい所は心覺悟に印を付け、家に歸つて裁縫などの側、復習をさせ、忘れた所は書き取りの中より繰り出して教へ、或は叱り或は慰め我身を忘れて苦心せられた。此の如きこと一日も怠りなく、家を思ひ子を思ふ赤心は廻らぬ筆にも力を與へて、積りくつて終に論語二十篇の書き取が出來た。斯る教養を受けた陣狼は、果して後に立派な人物となり學問も上達し、丈右衛門と改名して時の藩校時習館の先生とされた。先年まで侍講を勤められた故樞密院顧問官元田、永孚先生は、丈右衛門氏を德行學問共に優れた人として「純乎眞君子似」秋實飲醇酒」とまで評せられたさうである。

山地將軍の母君といひ、津尾子夫人といひ、決して情けの無かつた人ではない。寧ろ人一倍の愛情を持つて居られたに違ひないが、其の愛は盲目的の愛でなくて、理性に従つた愛であつたから、斯くも立派に教育が出來上つたのである。「可愛い子には旅をさせ」の諺は盲目的の愛を斥けよといふ意味に外ならない。同情といふことにしても只涙ばかりの同情でなく、相當考慮を経た同情でなければならぬ。即自己の立場や對者の立場や社會との關係といふものをすつかり考へて眞に其の人を生かし、社會文化を進め得るかどうかといふことを考へた上での同

情でなければ、折角の同情も却つて弊害を來すことになる。

一體人間の精神の働きの中には、感情的の要素が常に伴つて居るものであつて、凡ての行動の原動力を爲して居る。そこで感情は悪行にも關係があるけれども、亦善行にも關係がある。若し吾々の生活から全く感情を取り去つたと假定したら、人間は全く「稿木死灰」のやうに、血もなければ涙もなくなつて仕舞ふ。理智が働かなければならぬけれども、餘りに理智に偏するといふことになれば、頭は冷酷になり物事打算的になり物質的になり利己的になつて、愛とか同情とか犠牲とかも自然となくなつて来る。女子の生活は殆んど感情生活だと言つてもよい位に感情に富んで居るが、是は一概に排斥すべきことではない。是が實に夫の内助者として、子女の母として家政を整理し、子女を教養し家庭をして慰安休養和樂親愛の場所たらしめ、一家をして春風駘蕩の氣に満たしむる中心力となるのであるから、感情に富んで居ることが何も悪いことではないのみならず、是を缺いては女子の女子たる特質が缺けるといつてもよい位である。けれども感情そのもの丈で動いては、明らかな方向を有たないから、理性の力で之に正しい方向を與へなければならぬ。假りに感情を動く所の機關車に譬へるならば、理性は動かない軌道のやうなものである。或る考へが動いて往くとき、是を正しく統制して行くのが理性の働きである。それ故「理性に従ふ生活」といつた所で、強ち感情を抑制して全く殺して仕舞へといふ意味ではなくて、理性で以て道理にかなつた方向に向けて行けといふのである。從來婦人の生活といふものは、多くは感情ばかりの生活であつて知識を調和した生活でなかつた。従つて無暗と感情に支配せられて、或は神經的となり或は發作的となり、或は迷信に陥り或は柔弱に流れて居つた。感情が知的の内容も有せず、又洗練もされないものなら、頗る低級なものといはなければならぬ。感情は前に言つたやうに、全く之を斷滅して仕舞てもいけないが、さらばといつて感情を唯感情として自然のまゝに放任して置いてもよくない。感情は成るべく之を美化し純化する必要がある。低級劣悪な感情が屢々起れば、其の行動は自然と劣惡に傾き、高尚優雅な感情が屢々起れば、其の行動は自然と高雅になつて来るから、吾々は常に高潔な感情別して女子は優しい感情を養ひ又平素から感情を平和に保

つやうに修養しなければならぬ。そこで教育上感情の陶冶といふことが必要になつて来る。彼の音楽や詩歌に興味を有つたり、繪畫や彫刻や建築杯を鑑賞したり、又は園藝を樂んだり、お茶を立てたりお花を活けたり、或は郊外を散歩し山河を跋渉して、親しく大自然に接觸し、造化の妙工を讚美したりするやうなことは、其の方法さへ誤らなかつたならば、相當其の目的に副ふことが出来る。

世には感情とか本能とか衝動とかいふものは、動物が生れるとから有つて居る自然の働きであつて、人間も動物である以上其の本性に従つて生活するのが自然の生活である。自然に背いた生活は、虚偽の生活であつて眞の生活ではない。喉が渴いて水が欲しければ勝手に水を飲むがよい、空腹で物が食ひたければ勝手に食事をすることがよい、好きな人なら親密にするがよい、嫌いな人なら嘩喧をするがよい、勉強時間だからといつても遊びたければ強いて机に嚙り付いて居るには及ばない、菓子盆に盛つてあるお菓子が欲しくて口から手が出さうであつても手を付けないのが、禮儀だ道德だと言つて居るのは間違ひである。厭やだと思つても交際を絶たないのが義理だとか好きだと思つても交際しないのが道德だ杯といふことは、自然の生活ではない。人間は矢張動物だから本能欲望の赴く所に隨つて自然の生活をなすべきである杯と、極端な説を唱へる人もあるが、是は一旦進化した人間を再び禽獸の仲間へ墮落せしめようとするもので、自然の生活ではなくて、却つて不自然の生活である。人間も動物だから、他の動物と共通な本能やら衝動やら感情やらは固より持つて居るが、人間が他の動物と異つて居る著しい點は、理性の力を以て是等を統御し得るといふことであるから、此の點を發揮するのが人間の眞の生活であり、自然の生活であらねばならぬ。美味にも飽きたい、美衣も着きたい、逸樂にも耽りたい、虚榮も満足させたい、自由も得たい、名譽も得たい、是れが人間の慾望である。道德を顧みずして私利私慾を満足させることが眞の生活であると考へるから、世の中が華奢逸樂に流れたり家庭の平和が破れたり、社會の風俗を害されたり終には國家の安寧をも紊すやうなことになる。近頃新しがる人達が、好奇心に驅られてこんな説に共鳴するといふものか、又は青年男女が放縱な生活がしたい爲めに自己辯護の道具として歡迎するといふものか、本能満足

々刻々に起つて来る事柄の中にはゆつくりと考へて判斷する餘裕のない所謂電光石火の如くに突發する事件で、即座に解決しなければ間に合はない事柄もある。斯る際に即決斷行して、而かも理非曲直を誤らないやうになるには、相當に修養を積まなければならぬ。心掛さへあつて修養すれば最初は困難を感じたことでも、追々習慣となつて、容易に善を行ひ惡を避けることが出来るやうになる。是れが徳といふものである。其の徳を長年月の間積み重ね積み重ねして行つて、平生の行動がすっかり固まつて何時如何なる場所でも平氣で出来るやうになるとそれが即品性が出来たといふものである。孔子の所謂「從心所欲不踰矩」といふのは、品性が出来た上を更に修養に修養を積んで磨き上げられて、視聽言動即ちすること爲すことすべてが心の向き次第で、チツトも道理を外れるといふことなく、逍遙自在の境界に這られたもので、實に人間の行として最高極致なものであるけれども聖人と言はれる程の孔子でも最初からさうではない。十五の年に大學に志され年數を重ね修養を積み、三十の年に自立といつて社會や自分の境遇が變つても夫が爲めに心が動搖しないやうに志操が堅固になられ、それから又十年も修養して四十になつて不惑といつて、世の中の色々な説や議論に惑はされないやうになり、又十年修養を経て五十に達すると、世の中の事には天命といつて、天理天道自然に備はつた道理があるといふことが分り、又十年経つて六十の年に耳順といつて、何か耳に聞くことがある時には、偕ごういふものであらうかと研究するまでもなく、直ぐと心がそれに移り合つてチツトも道理に逆はないといふ、餘程熟達境界に達せられ、それから又十年経つて七十で前に述べた從心所欲不踰矩といふ立派な境界になられたといふことである。して見ると修養といふことは、一時的の問題ではなくて、吾々一生涯の仕事であるといふことを知らなければならぬ。そして堅忍持久日夜努力して、この立派な品性を作るといふことに心掛けねばならない。

今日 戊申詔書煥發記念日に當つてこのお話は縁遠いやうに思はれるが、詔書に仰せられた忠實業に服し勤儉を治めること、か、荒怠を誡めること、かいふことは、彼の私利私慾を擅に志本能的な生活のみの満足を目的として居つては出来ないことであり、又信義を重んじ醇厚の風俗を作るといふことも、人々が道理にかなつた生活

即合理的な生活をして、本能や感情の支配するがまゝに行動しないやうにならなければ、成績は擧げられないことであるから、今日お話ししたことをよく味つて修養するならば、矢張 詔書の御趣旨を實行することになると思ひます。長時間に亘つて靜肅に聴いて下さつたことを感謝いたします。

無線電話の原理について

特別會員 伊藤 通利

小學校を卒業して以來、ずっと片田舎の故郷で、自然の絶妙な美と温い恵に包容されて、平和な田園生活を續けて居る甲は、久し振りに萩に竹馬の親友だつた乙を訪れた。夕食後二人は相携へて散歩に出た。甲は僅の間に萩が變化した事に驚いた。—— 廣い道路 丈夫さうな橋これ等を往復する自動車の瀕繁なこと、汽車の汽笛の聞える事等であつた。尙ほ一層驚いた事は次の事柄であつた。甲はふと立止つて乙を顧みながら、屋上に高く水平に張つてある針金を指して……

甲「君あれは何かね。」

乙「ラヂオのアンテナさ。」

甲「ラヂオ? 近頃新聞紙上や、雑誌でよく見當るものだが、これは大都會ばかりに利用されて、直接僕等の様に片田舎に住むものには無關係で、よもや邊鄙な萩などに、こんな設備が出来て居らうとは思ひもよらんかつた、君あれで實際遠方の話等が聞えるかい。」

乙「勿論聞えるとも、一つ頼んで聞いて貰ふか。」

三人はある商店に入った。乙は甲の耳にラヂオの受話機を當てがつた。

甲「おや、長唄が聞えるよ。」

店主は新聞紙上のその日のプログラムを見ながら、甲に向つて、

店主「今丁度名古屋で唄ふ長唄をお聞きですが、大阪はもうA氏の講演が放送されて居る時刻ですから、それをお耳に入れませう。」

店主は機械の轆轤を廻した。

甲「長唄が講演に早換りしたよ。何だつて？」 自然は文明を包容し、文明は自然を征服する、文明は科學の所産だ、これが科學の勝利でなして何であらう……つて、これは面白い。」

甲は暫くして受話機を取り除いて、乙と共に戶外に出た。秋の夜の空は何時もの光が、美しく靜に微笑んで居た。乙は名古屋の長唄、大阪の講演、それを萩で聞く。世は進んだものだと思ひ、彼一人がこの世の文明から置き去りにされた様な面持をして、

甲「君ラヂオの理は大變むつかしいものかね。」

乙「なーに、たいした事はないよ。」

甲「では成る丈け平易に、その大様を話してくれないか。」
以下は乙が甲に述べた、ラヂオの原理の概要である。

▽ラヂオの意味

ラヂオとは元元は放射といふ廣い意味だが、普通ブロードキャスティング即ち放送無線電話といふ狭い意味に用ひられて居る。一體この放送無線電話といふのは、或る一つの場所で演奏された話や、音樂等を針金で連絡せずに遠近の多くの人が同時に聞く事の出来る電話である。この原理を話す前に、順序として音について述べよう。

▽音

今君と僕とが談話するとして、君の聲を僕が聞くまでの模様を見るに、先づ君は君の意志を表明するために、それに適當する様に、聲帯や咽喉中の薄膜を振動さす。するとこの振動はその附近の空氣に傳り、空氣の振動所謂音波を生じ、この音波が四方に廣がつて行き、僕の耳に入り鼓膜を振動させ、聽神經を刺激するので、初めて僕は君の聲を感知する事が出来るのだ。この場合、若し君が前と同じ言を、同じ調子で發聲しても、前よりうんと力を入れると、前よりも強く、且つ遠方まで聞えることになる。それは琴や三味線の調子の定つた絃を強く弾くと、それより發した音は強く且つ遠方までも傳はると同じ事だ。要するに音を感知するまでには、この様にすべて物体の振動と、その振動を傳へるもの及び之を受けて感知するものの三つに分けて大別する事が出来る。最も人間が音として感知する事の出来るのは、振動數に制限があつて、普通一秒間に十六回から四萬回位の間に於てはならぬ。従つてこの範圍以外の振動は音として感ずる事は出来ないのだ。

▽音と無線電話

無線電話で色々な話を聞く事が出来るのも、大体今述べた音の傳はる原理を應用したものであつて、音を遠方に傳へる爲に、音波の代りに電波を使用して居る。そこで複雑な構造の機械が種々必要となつて来るのだ。次にはこの電波について述べよう。

▽電波

電氣はその性質上から陽電氣と陰電氣とに分け陰電氣を有つて居る微粒子が電子であると考へられて居る。そして電子が針金の中を流れて居るのが電流であつて、この流動の方向が常に一方向のみと定つて居るものが直流で普通の有線電話や電車等に用ひられて居るのはこれだ。又是に對して電流の流動する方向が交互變化するものが交流である。普通電燈に用ひられて居るものはこの交流であつて、一秒間に數十回から數百回位方向を變へる。この方向を變へる度數が一秒間に一万五千乃至數百萬といふ程に、非常に多いものが高周波電流であつて、無線電信や無線電話に用ひてゐるのはこれだ。高周波電流が針金中を流動するといふ事は、電子が非常に大きな速さ

で、針金の中を往復して居る状態、即ち電子の振動である理だ。

物体の振動はその附近の空氣に振動を傳へて音波を生じた様に、電子の振動は其の附近にあるエーテル(之は後で説明する)に振動を起す。このエーテルの振動を電波といふのだ。

音波は一秒間に約三百四十米位の速さで、又電波は一秒間に約三億米(地球周囲の七倍半)の速さで四方に傳つて行く。音が遠方になるにつれて段々弱くなる様に、電波も之が届くには範圍がある。しかしその範圍は音波に較べて非常に廣い。僕等は音波の届く範圍内に居れば音を感ずる事が出来るが、電波は常に僕等の身邊を頻りに交錯して居るにも拘らず、これを聞く事も見る事も出来ない。即ち電波は其のまゝでは感知する事は出来ない。電波の届く範圍内に、適當な針金がある時は、電波は其の針金の中にこの電波を生じた針金中の電流と等しい高周波電流、即ち電子の振動を誘起する。それは丁度音波がこの音波を生じた物体の振動と同じ様な振動を、耳の鼓膜に起すと同様である。しかしこゝに誘起された電流は極めて微弱なもので、直に五感によつて感知する事は出来ない。前に述べた電子の振動を電波として傳播する「エーテル」について説明しよう。

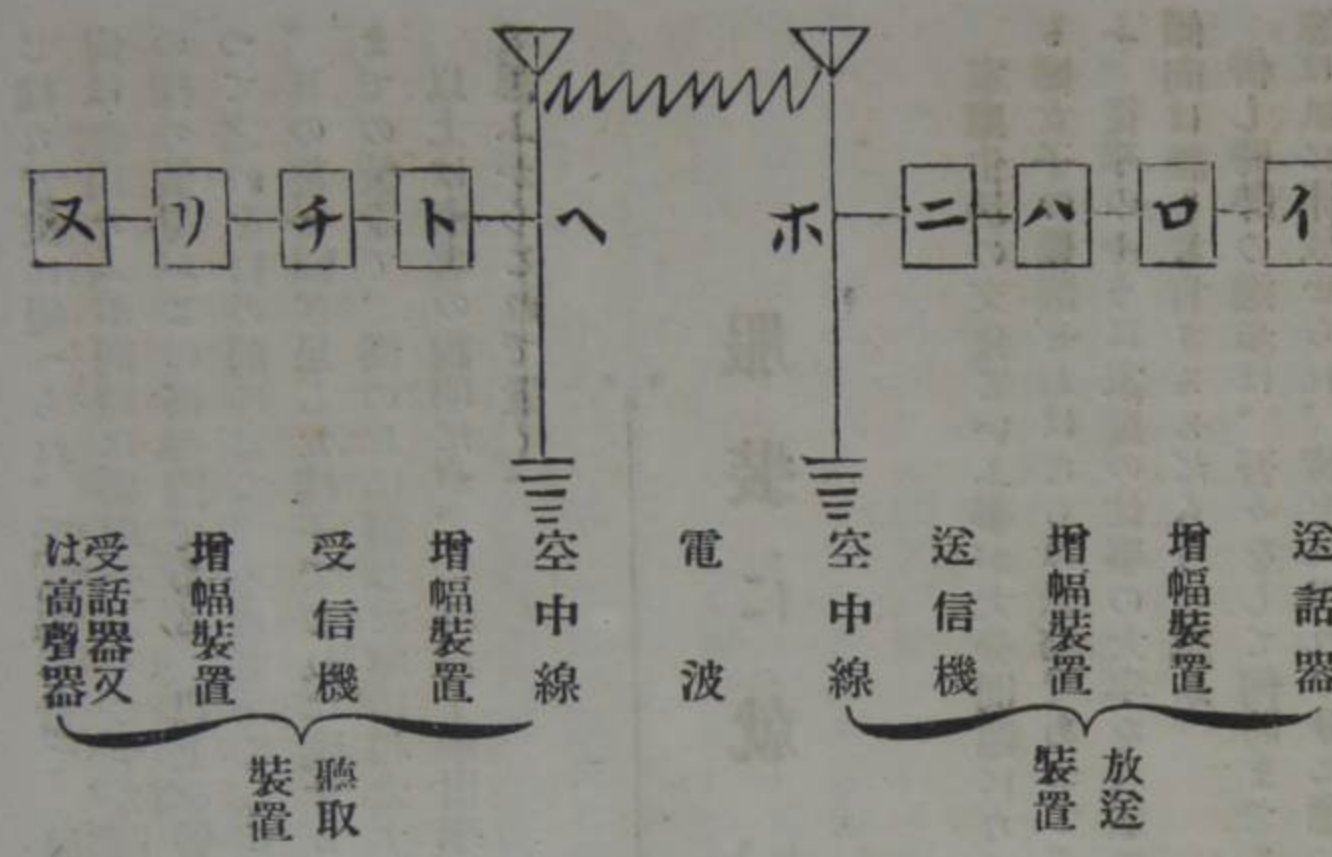
▽エーテル

一室内に空氣が瀰漫して居る様に、この全宇宙即ち地球と他の天体間は勿論のこと、各原子に至るまでも普く瀰漫して居るものであつて、重さはないが彈性をもつて居るものが「エーテル」である。と考へられて居る。一般に光や電波を傳へるものはこの「エーテル」である。以上で大体必要と思ふ事は述べた積りだから、次に放送局で演奏されてから、一般が之れを聴取するまでについて述べよう。

▽放送から聴取まで

放送無線電話はその機械や方法は色々あるが、何れも音波を電波に代へ、更に電波を再び音波に戻すために、種々複雑な機械を用ひられて居る。こゝでは其の一例を圖解を以て説明する事とする。

この圖の(イ)から(ホ)までは、放送局にある装置であつて、(ヘ)から(ヌ)までが聴取者が備へて居る装置である。



(イ)の送話器には、振動する幅の一樣に定つて居る電子の振動からなる所謂持續高周波電流が通つて居て、この前でこれに向つて演奏すると、そこに生じた音波は、送話器中の一樣であつた電子の振動の幅に大小の變化を起す。即ち音聲によつて生じた空氣の振動の状態を、そのまま電子の振動に代へた事となる。茲に生じた電子の振動は微弱であるから、(ロ)及び(ハ)の増幅装置で、電子の振動をその状態を變へずに、振動の幅を増大して遠方までも届く様にする。それは丁度擴大器を用ひて、小さい圖を原型のまゝ、擴大する様なものである。次に送信機(ニ)は増大された電子の振動をエーテルの波即ち電波に變へて、これを空中に高く張られたアンテナ(空中線)(ホ)を経て四方に送り出すのである。この電波は其まゝでは、我々の身邊に届いても、直接何等の感覺をも惹き起さないから、聴取用の装置が必要となつてくる理だ。

電波が届く範圍内に、聴取用のアンテナ(ヘ)があると、これに到達した電波は、放送局のアンテナ(ホ)にあつたと同じ様な高周波電流を誘起する。この電流は極めて微弱であるから、増幅装置(ト)で強められる。それでも未だこのまゝの電流では、直接音波に代へる事が出来ないから、受信機(チ)によつて、可聴電流即ち普通の電話に用ひてある様な電流に變へ、再び之れを増幅装置(リ)によつて強める。次にこの電流は、受話器(ヌ)によつて放送局で生じた音波と同

じ様な音波に變へられ、受話器を當て、居る人に音の感じを起さすのである。
尙ほ澤山な人が同時に聴取せようとする時には、受話器の所に高聲器を連結すればよいのである。蓄音器の喇叭の様な装置がこの高聲器である。以上を譬へて言へば、君は遠方から僕を呼びかける時には、兩の掌で同筒を作つて之れを口の前に當て、メカホンとして聲を擧げるだらう。すると僕は君の力に向つて、掌を耳に當てがうて、耳の葉を繼ぎ足した様子でこれに應ずる。この時君の掌のメカホンに相當するものが、この圖の(イ)から(ホ)までの装置で、僕の耳に繋した掌に相當するものか、(一)から(ス)までの装置であると思へばよい。
以上は概略の説明だが、これが了解出來たら、詳細なことは他の書籍によつて、充分理解されることが出来ると思ふからこれで置く。

服装に就いて

特別會員 北野ウメ

家庭生活の文化といふ事が大分問題になつて、衣食住共にそれぞれ改善を提唱されて來た。就中服装問題は最も婦女子の覺醒せねばならぬ急務であつて、之れが實行には非常な努力と熱心とで研究しなければならぬと思ふ。從來のやうに家庭の仕事の大半を衣服の整理に費し、無意義な時間を消費して顧る所のない弊に陥つて居る傾向は誰も首肯するだらうと思ふ。

併し時勢の進歩は、吾々をして何時までも安逸な生活を許して呉れぬ。婦人が長い間、閉ぢ籠められて居た深窓は夙に開放せられ、皆それぞれの分に應じ其立場立場によつて、相當なすべき事をしなければならぬやうに

新らしく強いられて居る。此時に當つてあの振りの長い袖、足にからまる裳はどうしても日本婦人の活動力を削ぐ第一のものであらうと思ふ。いふまでもなく、日本婦人服の優美で、而も閑雅である點に於てならば、世界の何れの國にも優ることも劣らない所の自信は持つて居るが、活動といふ點から推したなば、どうしても實用的でないといふ缺點は免れないと思ふ。

總べて美の標準は自身の美と外界との調和が取れて、初めて本當の美しさを現はすのである。それ故に社會狀態や、生活様式が漸次變化して行くに従ひ、其趣も變つて來るのである。昔は平穩無事であつた皇國も、今や歐米諸國と伍して世界的に進んで行かうとする我國の現在は、總てのものが時々刻々變つて行くので、これまで美しかつた和服も外部との調和が缺けて行く場合がある。其結果は自然活動し易い服装を選ぶことになる。現在の日本の服装、特に婦人や子供の服装が活動に不便で、實用に適せないから、時代に適應するやうに、何とか改善の道を講ぜなければならぬことが、一般識者の問題となつたばかりでなく、眞面目な若い勇氣のある婦人によつて改良服となり洋服となつて實行されつつある。

住宅の様式が依然として居る以上、又趣味や習慣の點からいつて、全く洋服とすることは困難であらうが、さうかといつて、今までの純日本式の煩雜な服装では活動的であるべき近代人は到底耐へられないから、或程度までの二重生活、和洋兩様の服装の準備は矛盾のやうであるが、此過渡期に際して又止むを得ないことであらう。近來子供洋服は非常に流行して來た。都會では美しい人形のやうに飾り立てた振り袖姿の子供は、殆ど見られない位洋服全盛である。實際遊び盛りの子供は、輕快に運動の出来る洋服の方を喜ぶであらう。裾も軽く跳ね廻るだけ跳ねてのびのびするには、全く和服の形式では望み得ぬことである。和服はあの天真爛漫な子供を何方かといふと、内氣な而も早熟な子供にして仕舞ふ傾向がありはしないかと疑はれる。衛生上又經濟上、子供洋服の特質と可否は誰しも理解される所である。

斯くの如く服装は漸次改善を加へらるゝと共に、裁縫上の知識技能をも大に工研風究して能率をあげ、これま

でのやうに單に和服裁縫の熟練に止めず、婦人服や子供服位は一般の家庭に於て、和服裁縫の出来ると同様に、誰にも仕立得られるやうにならなければならぬのである。自分が自由に洋服を仕立てる事が出来ることすれば、第一自分の趣味に合った服を作ることが出来る。又残り切れで帽子を作るとか、古い袴、古い中形物等を利用して女児服を作るが如く、廢物利用の方法も講ぜられるわけである。

文化生活をなすにも生活改善の實を擧げるにも、先づ第一歩として婦人は和服裁縫と同時に洋服裁縫を修得し、單は流行に心を奪はれずして、眞面目に各人の研究心を高めることが必要である。

服裝は社會的に重大なる意義のあることで、輕々見逃すべき問題でないことを痛切に感じる。

母性愛に就いて

特別會員 堀江ウタコ

圓滿なる心の持主は、多くは母の無限の愛にはぐくまれて育つたものであります。又偉人として名を後世に揚げた人も、無論母の大なる愛の力に教育せられたものであります。菅公は母の、

久方の月の桂も折るばかり

家の風をもふかせてしがな

の慈愛に充ちた、併も力強い念願の籠つた歌の心に育つて、あの様な文學の神にまで崇められるやうな方となられました。楠木正行も亦、母の愛と力とに、其無謀の憤死を諫められて、遂にあの様に南朝の復興に忠君の誠を現はし、忠孝兩全の鑑と仰がれるに至りました。豊臣秀吉は、名もない母の愛の手に育つて、驚天動地の働き

をしました。ワシントンも背後に賢き母がゐたことは誰も知る所でありませう。合衆國初代の大統領に選ばれた彼は、いつも議會に出かける前に、その日の演説を母と妻とに聞いてもらつて、母の承認がなければやらないといふ風でありましたから、合衆國をうんだものは正しくいふならば、ワシントンの母であつたといふべきかも知れません。又大統領退職後は老母の側で、その慈愛にひたつてゐたと申します。この母性愛こそ婦人の本性であり又天職であり、婦人の精神の美であります。丁度太陽の様に生命の持續にかくべからざる大なる力をもつてゐるものであります。其の上、生命を養ひ、愛し育て、教への所の大なる原動力であります。

婦人は自然の賜として生れ落ちて、一生を終るまで、人生の生活を眞に人間らしくする温い心をもつて居るものであります。この賜が母をして子供の神たらしめ、妻をして夫を幸福ならしめるものであります。又この温い心は家庭の火鉢をかこむ人達を其の火よりも強く温めるのであります。

家庭に於て、この温い母性愛にひたつて、順調に育つた子供は従順であつて、無邪氣であり、教育の可能性が大であります。其の子供の將來を思つて言つてきかせたことを正直に受入れてくれます。温い感情で接してやれば之を暖く受入れます。世の多くの子供は大抵この母性愛によつて順調に進んで來て居ります。中には之をひがんで受取つたり、冷たい感情で應酬したりする子供があります。さうした子供の家庭をしらべて見ますとこの母性愛に就いて、順調なはぐくみを受けてゐないものが多いのであります。

世に桎梏の苦みを受ける罪人などについて調べて見ても、彼の大逆叛人も、この尊い母性愛の充分でなかつた事が多くは原因をなしてゐたと申します。

この母性愛は未だ母とならなくとも、將來母となるべき女子には、當然具備してゐなければならぬ特徴であります。是をよく現はしてゐるものは、ナイチンゲール嬢の創めた赤十字社の事業たる看護婦が一に婦人の手のみで行はれてゐることであり、この赤十字社の愛は只に味方のみではありません。敵にまでも及ぶのでございます。

彼のエレン・ケイ女史は、かうも言つて居ります。家庭を持たない者にも旅につかれた渡鳥すら、其所に立寄ればその暖い手に寄つて温められたのであります。何故ならば、母性は無限の力をもつてゐるもので他の幸福を願ふ所にあり、やさしい心遣ひをするところにあります。即ち熱い太陽の性質と、波動する大海の性が、同時に母性の性質であるからであります。

この様に母性は犠牲的、超越的でありましたから、古代の世界から宗教上の崇拜の対象であつて、いかなる宗教傳統でも、かやうに其長い時代を通じてもこの儘の姿を傳へてきたものは他に有るだらうかと、其著「母性の復興」の始に言つてゐます。實にエレン・ケイ女史にとつては母性は、何物にもへ換がたい殆んど讃仰にも値するものであります。

然らばその母性愛は、普通の有りの儘の現し方でよいか。是には相當の考慮を要しませう。所謂盲目の愛でよいでせうか。祖母が孫を愛するが如き唯可愛く、ではいけません。また古來より行はれて居りますが子供には菓子をやると云ふ風で、甘い物があれば、時も品もかまはず與へます。これは子供に取つては大變喜びます。また餘所の子供にもあれば同時に與へます。そして子供の笑顔を見て、自分も満足して居ます。日本人の感情ばかりの生活には迷惑が多うございます。私もこの迷惑を度々重ねさせられました。子供の便通がわるいと思つて、一二日前の献立を考へて見ても、さしたる不都合も無いのに、原因をよくしらべると、他家のおばさんに何々を頂いたと云ふ場合が多くございます。これが若し玩具であつたならばどんなに仕合せであるかしれません。或在米二十年と云ふ方歸國に付き御目にか、つて色々米國の様子をきいて見ますに、決してこんな風の愛し方はいたしません。若し與へたかつたならば、先方の宅の人にきいて、「これを與へてもよろしいか」それからいたします。ほんとうに彼の國の婦人はうらやましい程合理的の生活をして居ます。たゞやさしい許りでは済みますまい。そこには大なる進歩がなくてはなりません。母親たる本能が母性愛にまで進んで行つた發達は、文化の進展上に於ける最も偉大なる功績の一つであります。かの動物でさへ、單に其子供を愛するだけでなく、是に或る訓練を

與へます。獅々は子をうめば三日にして之を斷崖から谷底へ落し、よく無事に達したならば之を育てると言ひます。子猫が水に入らうとするのを制止しようとして、適當な方法を得るに困惑して居る母猫は、遂にその子猫を一度水中に突入れて、直にこれを引上げると言ふ方法をとつて、その豫期して居る自分の教育的効果をあげてゐます。俗に「可愛い兒には旅をさせよ」の諺があります。我が眼に入れても痛くない子であるが其の愛におぼれてゐるならば、到底子供を人間らしくすることは出来ません。更により大きく愛するためには、之を訓練する必要があります。「旅は憂いもの辛いもの」と申しますが、その悩みを體驗させてこそ、そこにより大きい、より強い母性愛を感受させることが出来るのであります。これは決して放任ではありません。旅する間にも、絶えず心は子供の傍を離れてはをりません。守り神となつて常に身邊をこりまいて彼れのため善かれかしと導いて居ります。また子供も時には強く叱つて可愛さうだと氣付く時もございます。けれ共眞の母性愛の結晶ならば決して心配は入りません。子供は叱られて、自分の我儘が通らぬため、ワット泣き出します。けれ共そのまゝ、放つて置きますと泣き止めて考へて居ますが、漸くして小さい聲ながらも「母様もうしませんよ」と申します。母の前には何のいつはりもなければ節りきもない。眞の母性愛にめざめます。世間には自分の感情にまかせ押入れに入れて驕をいたしますが、これは餘りきゝめがありません。それよりもねむる前半意識の時を利用して靜かにいひきかせること、なか／＼効果の多いものでございます。いくら母性愛でも愛の妄用、亂用では價值がありません。社會的訓練をなすには、其の愛に制限を施さなければなりません。即ち教育的に子供の性質に合して施すのがよろしいでございます。よく婦人は「天成の教育家だ」と申します。是は勿論さうした目覺めた愛の持主たり婦人にのみ許される言葉であると思ひます。

この立派な母性愛が家庭教育の基礎であり、國民教育の基礎であり、又其終極であります。女性としては、よく母性の尊貴なることを自覺して、母は彼の子の母たることを誇るほどのものでありたいと思ひます。

音楽と人生

特別會員 佐々木 秀子

音楽と人生、それは丁度生物と日光とが離れないやうに、又幼な子と乳とを離してはならない様に、音楽と人生とは離れないものではあるまいか。どんなに深い悲しみも、又激しい怒りも曲によつてはあの七色の音によつて、どれ程和らげられ、慰められる事であらう。

生とし活けるものは、皆無意識的に、又は意識的に、音楽に憧憬れて居るといつてもよいと思ふ。鳩は笛の音を喜び、犬は鈴の音を娛し、兎は唄ふ聲に耳を傾け、栗鼠は三弦琴に恍惚とし、又胡弓の音を海豹は慕ふといふ、又彼の無感覺者らしく見ゆる象、豚でさへも音楽を娛しむといふ事である。況して情緒の發達した人間に於ては猶更らの事ではあるまいか。

村祭の夜に響く單調なリズムの太鼓の音にも、人々の心は浮き立つて足も軽くなる。廣告屋と共に町行く簡單な樂隊にも、子供達はぞろ／＼と何處までも浮かれ歩く、船屋の吹く笛の音の旋律が響く時、如何に多くの子供等が馳せ集る事よ。

若し此の世から音楽を取り去つたなら、どんなに寂しくなるかといふ事はたやすく想像される事と思ふ。譬へば眼から色彩を奪ひ、口から甘味を取去つたのにも増して精神の慰安を失ふ譯である。

人生に音楽があることは、沙漠にオアシスある如く、夏の日に夕立があるやうに、人生を潤し、疲れたる心を慰めて、明日の門出に新しい力を附けるものである。斯く言はば或は反對する人があるかも知れない、音楽を解せない又好まない人々にありと、しかし乍ら夫等は多くの場合境遇がさうさせるものである。決して天性ではないと思ふ。

美術を解せない人も花を見て美を感じ、料理法を知らない者も美味は何人も好ましいに違ひない。美しい樂の音を聴く時は何誰でも自然に氣持が柔くなるものである。優れた樂の音は鬼神を泣かしめ、神佛も感應しますとは昔から言ふ事である。哀猿叫ぶ時、腸を絞るは只詩人ばかりではない、秋の夜にすだく虫の音は勇士の心を摧き谷間に啼く鶯の聲は心なき樵夫にもあはれを感じしめる。

保昌の故事を引くまでもなく、一つの藝術に共鳴した時は、假令それが平素憎み合ふ敵であつても、其の瞬間には全く憎しみも、反感も消えて心が溶け合つてしまふものである。此の事は音楽に限られた譯ではなく、すべての藝術は皆さうである筈だけれど、その中音楽が一等著しいやうに思はれるのである。此の意味から、音楽が廣く一般に行き渡り、眞に人々に理解されたなら、人の心と心との接觸が、より滑に滑ひあるものとなるのではあるまいか。そして人生をより多く、楽しいものとする事が出来るのではあるまいか。しかし音楽を解するといつても、必ずしもベートーヴェンのソナタを論じ、シューベルトのリートを評する事ばかりがさうでもない。盆踊に合せる彼の飾り氣のない旋律にも、酒屋の小僧が自轉車で走りながら、口ずさむマーチの一節にも、夫れが心から唄はれるものであるならば、そこには美しい藝術の玉が光つて居るのである。

一つの歌を心から合唱し、又心ゆくばかり思ひを込めて唄ふ歌を面白い!!と思つて聴く人には、夫等は皆藝術の力に魅せられたのである。幼稚園で習つて來た歌を夕食の後に唄つて聞かせた幼い子供が、お爺さん、お婆さん、お父さん、お母さんを悦ばせ、うれしがらせたなら、その場合その子供は立派な藝術家である譯である。假令それが幼稚であつても、其の人達に相應して居るならば、藝術を味ふよろこびに變りはないのである。

此の意味から、生活と音楽とをもつと密接なものとしたものである。そして自分の可愛い幼な子を育てる、又これから育てなければならぬ若き母や、母となるべき方が心から美しい子守唄を唄つて頂きたい事である。若々しい聲で、慈愛のこもつた調子で唄はれる子守歌に安らかに守られて眠る子供は、如何に幸福な事であらう!!それが成長後にどれだけ多く、人生に影響を及ぼすかは量り知られない程である。其の反對に幼な子のそば

でつまらない愚痴をこぼしたり、邪慳な言葉を避けねばならない事はいふまでもない事である。此の場合選まれるべき曲が幼稚なものから、段々すぐれたものに、簡單なものから複雑なものへと進めて行く事を心掛けねばならないのである。

何れにせよ、音楽は人生に言ひつくせない程、深い深い関係があるものと思はれるのである。

近江の海 夕波千鳥 汝がなければ 心もしぬに 古おもほゆ
和歌の浦にしほみちくれば湯をなみ茶べをさして田舎なまわたる
白がれもこがれも玉もなにせむにまされる實子にしかめやも
たび人のやどりせむ野に霜降らばわが子はぐくめ天の田舎むら
わがせこは物な思ひそ事しあらば火にも水にもわれなけなくに
途に行く道さは兼ねてきゝしか昨日今日さは思はざりしと
色見ぬでうつるふものは世の中の人の心の花にそありける
あつさ弓はるの山べを越ぬれば道もさりあへず花ぞ散りける
住の江の松を秋風ふくからに聲うちそふる沖つ白波
君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る
いづくにか父の聲聞ゆこの古き大きな家の秋の夕べに
たはむれに母を背負ひてそのあまり輕きに泣きて三步あゆまず
星一つみ空に高くきらめきて空しき谷に木枯の吹く
金色のちひさき鳥の形して銀杏ちるなり夕日の間に
春の日にむかひて立てばよるこびが光となりて降りそぐかな

柿本人麿 山部赤人 山上憶良 作者未詳 阿部女郎 在原業平 山野小町 紀貫之 凡河内躬恒 紀友則 若山牧水 石川啄木 佐々木信綱 奥謝野品子 尾上柴舟

文の園



作文

夜のお使

本一 堀本 シツエ

壹圓の紙幣をしっかりと握つて、私の家を出ました日は早西山に沈んで、あたりは刻一刻と暗くなつて行くばかりです。淋しいくと思ひながら道を急ぎました。漸く片河町まで来てほつと一安心をしますと、突然何處かの野良犬が飛び出して私を目がけて、わんわんと吠え出しました。其の時私はこはく小石を二つ三つ拾つて、おそろく足音を立てないで通り過ぎてふとふりかへつて見ましたが、犬はもういませんでした。

夏の休暇日誌

本一 田中 清子

た。動悸をおさへ、小走りして店屋へ行き、バナ、どりんごを買つて路に出ました。
何げなく空を見上げますと、數限りなくきら／＼と星が光つて誠に美しい。私はこんな静かな晩に大聲で歌を歌ふのが大好きです。それに此の日はなぜか、後から人がついて来るやうな氣がして、歌の端屑もいへない、それであるのに、べた／＼と草履の音がする。後を顧みても誰もゐない。私が止まれば音がしない。さうだ、これは私の足音であると思ひましたから、素足になり、買物と草履とを持つて、一所懸命に走つて歸りました。いつまでもく動悸は高鳴つてゐました。

(一)

朝五時に起きて朝顔の花を数へてみた。赤いのが七つ、白いのが九つ、絞りが六つ、濃い紫に白のふちとりが七つ、昨日よりは五つ程多い。食事をすまして、英語と講讀の復習にとりかゝつた。

ふとペンを置いて畠に目をうつすと、義ちゃん此の暑いのにごそ／＼畠をさまよつて居る。何をやるんだらう？ 義ちゃんのはき足で蟬をつかまへようとおせつて居るのだ。手をそつとさし延ばすと、とたんに蟬はぢー一聲のこして逃げた。義ちゃんははつと頭をかいた。

(二)

少女倶楽部の少女小説のあまりの滑稽さに、獨おなかを抱へて、笑ひこけて居ると、書齋の向ふの庭の松の木につく／＼法師が節おもしろく鳴いて居る。つかまへて見なくなつたので、跳足のまゝ、飛下りて、飛石傳ひに蟬をとつた。

大分の直子さんから、返事が來た、十日頃に歸萩するどあつたので嬉しかった。

(三)

波のもて來るハーモニカの音は誰がすきか。

お留守居

本一 馬屋原壽満

「ではお早くお歸り下さいませ」と私がいひ切らない内に、母は町へ用たしに出られた。父は母よりも一三時間も前に出てゆかれたので、もう歸られるころである。

淋しくなつたので本など出してよんでゐたが、がたつといふ物音にびつくりして勝手の方へかけつて行つた。すると猫がごろ足で板の間へ上つて、何か茶碗でもこはしたのか、こけが一ぱいちらばつて居る。をかしいことだと思ひながら、そこから土間を見ると、思つたとほり小皿がこはれて落ちて居た。私はその時すぐ猫は追拂つたが、小皿の事が心配でならない。たつた小皿一枚ぐらゐ、猫が落してこはしたのだからよいやうなもの、自分が留守番といふやうな大切な役目を持つて居ながら、こんなことになつたのであるから、如何にもすまないやうな、また猫が憎らしいやう

蚊の攻撃がはげしいので、とても家には居られない

そこで父や兄と相談して、舟で涼みに行くことにした。すーと舟は岸をはなれた。毎日の水泳で赤銅色になつたA兄さんの逞しい手は巧に櫓を操つて行く。ゆるやかに流れる水——濃い緑色に揺ぐ葦の葉蔭——川を下るに随つて景色が好い。面影山の上空にはお月様が、半面顔を出して涼しさうに下界を照して居る。西の彼方の海の上の空に、夕焼雲が出た。赤紫が黄となり、オレンジ色となり、次ぎはあたりが深紅に燃ゆる。さながら火事の様だ。川面は赤や黄の色を溶した水が、小波に碎けるも一段と趣がある。父は何かの詩を吟じ初められた。

折りしも觀音院の晚鐘が、静かな黄昏を一きは高く低く流れるやうに響いた。

川向ふを長い黒い煙を延いて、ごつごつとん汽車が通る。それに負けまいと自動車は全速力を出して競争する。舟は鏡の様な上を滑つて行く、ばつしやばつしや水は舟縁を洗ふ。

ぼつちやん——突然大きい音がした。鰯が飛び上がったのだ。俄に水面には波紋が起る。あたりは暗い。

な氣がする。

そんなことを考へて居る内に、格子戸が、がらつとあいて父が歸つて來られた。それで私は小皿のことや猫の事などを話すと、父は笑ひながら「それは猫のことだから、いつて聞かせてもわかりはしない」といはれて別になんともいはれなかつた。

なか／＼お留守番といふ役も氣がもめるものだ。

或子役

本一 小野清子

住吉祭も後僅かに一日になつてしまつた。私達は例の通り三人で又出掛けた。そして見せ物の中の子供ばかりの芝居の所に立つて、今日はこれで五度目だねと言ひながら互に笑つた。此處でしばらく芝居を見た。役者の中で一番小さい可愛らしい子は頻りにねむりかけてゐる。それを見た私は何ともいへぬ感に打たれた。大聲をあげて人を呼びながら、木戸を取つてゐた人はそれをむごたらしく、小人の木戸札を投げたので、其の子役は夢から覺めたらしく目をこすりながら、復ねむ

さうに立上つた、私は其の様を見ていざらしくてならなかつた。私はお祭に行くといへば華やかな着物を着せて貰ひ、小遣錢も不自由なく貰つてお祭にも行き、ねむければ其の時すぐにねむるし、何不自由なくして貰ふのに、ともすれば父母のいひつけを聞かずに、口答をするのを、此の子役にも或時までは父母もあつたであらうに、さうして慈愛の満ちた手で育てられたのであらうに、あはれにも今は此の有様にと想像を次から次へとめぐらせてみた。そして心の裡では、自らの行爲を恥ぢた。いよくこれからはよく父母のいひつけをまもり、口答もすまいと深く心にちかつた。私が改心したのも、此の人の爲にと教へられたのだ。あの子の今の身と、私の今の身とおもひくらべて、そこにいひ知れぬ有難さを思ふとき、両親の姿を忍び伏し拜んだ。

まだ外の方では、頻りにお客を呼び合ふ聲が、樂隊の騒がしい音より洩れて、一際響いて聞えた。

夕の大橋

本一 倉重トミ子

頭も冷々とするまで。

夢

本一 田村フサ子

英語の先生は教壇に立たれ、今の時間に試験して見ませう」とおつしやて紙を分けて下さつた。あらどうしよう調べてないのに。あちらこちらよりさ、やく聲がだん／＼強くなつたが、先生はおかまひなしに、すら／＼と問題を黒板にか、れました。私達はどき／＼動悸のする胸を体さへて書く中に、第二番と第四番はどうか出来たが後の三問題は出来ないで、血と涙とで考へてゐる中、ふと頭を上げて見ると時計はもうあと十分ばかりだ。氣はいやが上にもあせる、時間はないし、問題は出来ずにもぢ／＼する中に、友達の一人在り泣き出しさうになつた。すると情知らずの鐘が／＼／＼と鳴りひびいたので、私は大聲を立て、泣いた。其のさたん目が醒めた、起きて見ると夢であつた。まあよかつた。とは思ふもの、夢にまでと思へば尙更

姉と一處に、松本大橋の方へ散歩に出かけました。もう多勢の人が来て、橋の上で歌つたり談話したりして涼んでゐますので、私も其の仲間に入りたくなつたので、姉をすゝめて欄干にすがりました。河口の方をながめますと、鶴江台の家の燈火が水にうつて、一燈は二燈となり二燈は四燈となつて、此處彼處に點在してゐる夕の鶴江台はさながら油絵のやうでありました。

西の空を仰ぎますと、指月山の邊に夕を惜む夕映の雲が西北の方にわづかにのこつてゐました。折から一かたまりの黒雲は、この雲を一呑にしようとするかの如くだん／＼とやつて來ます。眼を左に轉じて上流を見るに皎々たる弦月は、あはく水にうつて、美しいあやにしきを織るやうに、街燈の光は金色に輝いて、闇路を明るみへと誘つて居ます。

しつとりとした河面を縫うて、一隻の船が上流さして、水掉をたて、行き過ぎました。やがて船からは、清らかな豊かな樂の音が振ふが如く、そ、るが如く流れて、私共の心をしめやかに誘ひました。いつまでもいつまでも欄に頭をおしつけて聞き入りました。袂も

悲しい淋しい氣がした。そつと枕の下に手を延ばして見ると、びつしよりと涙が出てゐた。そして私はいつもでももじ／＼してゐた。今終りの夢をくりかへしながら。

舊師に送る手紙

本一 松屋千代子

此の暑さにも、先生にはお變りはないさうで、誠に結構でございます。私は海水浴で、色は黒くなりましたが元氣づきました。

湯から上つて表に出て見ますと、御手紙となんだか包が来てゐますので、早速開けて見ます、案外にも英語の本でしたからびつくりしました。それも私が、第一學期の成績をお知らせしました時、英語の點が悪いし、又始めての學課でもありましたので、ほんとうに方角もそれなかつたところへ、先生のこのお心づくしの御本私はうれしく、私胸の中に輝いて私の指針となりました事を深く感謝いたします。そして私はこの御恩に必ず報いねばならないと、覺悟いたしました。

あ、今晚は静かな月の夜です。浪の音が遠く／＼不
斷の音をたて、ゐます。庭の隅の雜草の茂みの中から
ち／＼と啼く蟲の音がいひ知れず悲しく聞えます。
今私は只ひとり机にもたれて御手紙を、くりかへしく
りかへし讀みました。

あ、夜はだん／＼と更けて行きます。今日おさとし
下さいました。数々の心得をかたく肝に銘じて、永久
の榮えたいませう。幸に御心安んじて下さいませ。

さらば

ある日の午後

本一 下井智恵子

ある曇つた午後の事であつた。お父さんは畑で草を
引いてゐられた。「ちいちゃんおいで」と不意の呼び聲
がもれて來た。私は何だらうと飛び出した。お父さんは
疲れた體を欹にさへて、土でまぶれた手で指さして
向ふの方に眼を向けられた。私はそれと思つて近づ
いた。それは何千何萬とも數知れぬ蟻が、規則正しく
一本の道を進み行くのであつた。蟻の口先には各々眞
白な卵を咥へ、平氣で蟻の家にかけてゐる。卵を

運び終へた蟻は、一本の道を復も前の所に歸るのであ
つた。その時、面白い事がみつかつた。それは蟻と蟻
とが互に顔を合せては進み合せては進むのであつた。
何か物事を知らせるのであらうと思ふと、獨面自くな
つていつまでもみてゐた。そのうちお母さんやお姉さ
んもこられて、蟻の行く先を見ようと道を傳うたが、こ
う／＼行詰りがわからなかつた。あのやうに遠い、道
をかまはずに、小さな蟻が土をほり、自分の辛さをも
わすれて、子に少しでも雨をかゝらせまいとすると、
思ふと感心せねばゐられない。それにつけても人の親
は尙更である事がつく／＼よくわかつた。又冬のたべ
物とするため、穴を土にほりたべ物を運び入るのを見
ると、蟻程力のつよい物はないと思つた。いろ／＼の
事を思ふと、いくらでも見てゐたかつた。そのうちお
父さんも體をきよめられ、ともに夕食についたが、今
日は何だか、心がきよめられたやうな氣がして一入樂
しくおいしかつた。

思ひ出の記

本一 松本ハル子

私は朝早く奥玉江にお使に行きました。山川、草木

等、皆なつかしうございました。堤の中途にある一軒
家の鶏は、暫く見ぬ間に、大變大きく成つた様です。
昔白水校に通ふ頃、横にしてあつた大きな樽は未だ其
の儘にしてあつて、それに蔓草が一面に這ひまはつて
居ます。川は相變らず昔の樂を奏しながら、今も流れ
てゐます。稻は大きく成つて、自由にのび／＼として
ゐます。そして所々には露の名残があります。雨の降
る日に溝の中に足を踏み落して、道ばたの井戸で洗つ
たその井戸がちゃんと残つて居ます。なんだかをかし
い様な氣が致しました。

白水校の前を通つた時、丁度校僕さんが運動場の草
を抜いて居ました。なつかしくて聲をかけて見たうご
ざいました。あ、白水校よ。なつかしい白水校。毎日
降つても、照つても、受験の大なる望をいだいてく
つたあの門、あ、白水校。

ほんに思へばあの頃の私、あたりは薄墨色に包まれ
て、人家の電燈が點々として輝く時分、或は白水山に
月の出る頃、あの一寒しい一軒家の道を首巻にうづま
つて、受験の空想を描きながら、我が家を指して只一

人さびしく歸つた事もありましたに。

あ、此の道こそは私にとつて思ひ出の深い歩きなれ
た道です。

夏の一日

本一 田中富佐子

あ、こ、ちよき眞夏の朝よ。

明るいまどりの色の草木も、露宿る夏の朝が一番うれ
しい事だらう。露といくば、露草の花が思ひ出される
それは暑い暑い夏も此の花ばかりは暑さを知らず、か
れんな花を咲かせ親しい友の露とたのしく夏をすごす
お、幸多き露草の花よ……

露を宿してゐる草を、軽くふみながら畠に出ると、
朝の空氣は清い。その清い空氣をすひ、朝風に吹かれ
ながら露をふむ時の心持は何ともいへない。ほんこ
うによい氣持である。

太陽が昇れば露はきら／＼と眞珠の珠のやうに光る
又朝風にさらされて、はす卒の葉に宿つてゐた露がこ
ろ／＼とこぼれ出して、あのきれいな珠をきたない土

の中に姿を消すこともある。

ほんにこちよいい眞夏の朝よ、……………

夕

夕飯をすまし、後をかたづけて湯殿に行かうとする
と、父が「へびが!!」といはれたのではつと思つて、
よく見ると、小さな蛇がながまつてゐた。見てゐると
蛇はする／＼と蘇鐵ののぼり始めた。私がいたづ
らに桃の種子をなげたら、うまく命中して蛇が落ちた
其の時かげから、のそ／＼出たものがある。見ると入
道びきである。おや／＼これは面白いと母もよんで眺
めてゐると、入道さんのこ／＼追跡する。暫く蛇を追
ひまはしてゐたが、蛇が蘇鐵の下へはいりこんで出な
くなつた。入道さんは蘇鐵のそばまで来て、残念さう
に蘇鐵の下をにらんでゐた。あたりが少し暗くなつて
入道びきの姿もたゞ黒いかたまりのやうにしか見えな
い。それでもまだ入道びきは、蘇鐵のそばをはなれな
かつた。

おや／＼これはおかしいな、

蛇が入道さんに追はれたよ。

入道さんでも蛙だから、

蛇には恐れるだらうと

思つたら、

あべこべ蛇が追れたよ、

入學してから

本一 米山俊子

私は女學校に入りましてから後と言ふものは、何を
見ても何を聞いても、うれしくてなりません。それで
誰れに會つても、自分の入學したことを聞かせて、や
りたいうやうな氣持がしてなりません。それから道をあ
るいても、ぶく／＼に太つた大きな兵隊さんが、ある
やうく頭を仰むけにして大手をふつて、あるいても少
しも人に恥づかしいなどとは思ひません。

人々が私に目をそ／＼と、いかにも人々が私の入學
したことを、ほめるやうに思はれて、知らない人に會つ
ても、自分の入學したことを語りたい氣持になります
いつまでも長く／＼このやうな愉快な心持で居たな
らば、屹度心の清い持主になることが出来るやうに、
おもはれてなりません。

此の頃

本一 中谷幸子

晩春だ!!! 晩春だ!!! 四方の山々には生に満ちた若
葉が緑を競ひつゝ、暖い日を受けてゐます。向ふに見
ゆる大照院が濃緑に包まれて、少しばかり屋根を出し
てゐます。其の隣に肩を並べて白壁が、杉の古木の間
から、ちら／＼と散らし模様様の様に見えます。一
段の趣がございます。

目の前に横たはつてゐる阿武川の川上に、今しも町
廻りの自動車がからん／＼と音を立て、橋を渡りま
した。もし同時に川下に汽車が通つたなら、どんなに
か好い景色でありませう。

私は時々痛む手をかへて、川邊に出て此の景色を
見ますとき、痛みも忘れてうつと見とれます。

校庭には今を盛りと蹴鞠が咲き満ちて居ます。梨の
木が春風に吹きゆられてゐます、その吹き渡る風が私
の頬をなでて行き過ぎました。

うれし涙

本一 白井美ノ

汽車は美しく輝くお日様と、どちらが先につくか
のやうに、山をこゝろ野を走つて午後の四時、早くもめ
ざす第二の故郷に勇ましい汽笛に、黒煙をはいて着し
ました。

窓から半身をのり出してみれば、夢にもなつかしい
お父様お母様を始め、今年四年になるたつた一人の妹
が其處に私を迎へてくれました。其の姿を見た瞬間、
私の目にはあつ／＼涙がうかびました。

がた／＼／＼／＼の音と共に車はびつたどま
りました。もう目の前には五月ぶりにお會ひする皆様
の面影、胸は一ツばいになつて口もきけないばかりで
した。近所の小母様や家の人と、我家の門に入る時に
彌生の花咲く春の頃、受験の心配を胸にいだいて、は
る／＼内地へ歸つた其の時の事を思ひうかべ、今日は
うれしくも、女學生の意氣を秘めて、なれし我家を見
る幸を得し身と思ふ時のうれし涙は、何の譬へやうも
ありませんでした。

月の夜

本一 藤村 秀子

涼しい夜、私は或る家のおばさんと、その内の俊ちやんと云ふ七つ位の方と、私のお母さんとお寺にお詣りをした。

俊ちやんと云ふ方は私は始めてお會ひする方だった。ほんとに可愛い、俊ちやんだつた。

私は此の方と一緒に話をして、とぼく／＼と歩んでゐた。いろ／＼とお話をしてゐるうち、此の可愛い、俊ちやんにはお母様がなくなつたといふことがわかつた。そしてこんなことを尋ねたら罪ではあると思つたけれど、お父様のことを尋ねて見た。

お父様はあのはなやかな東京へ行つていらつしやるといふ可哀さうなお話でした。

私の父は亡き人、母は他所に行つていらつしやる、やはり此の方にもお母様がないのかと思ふと、つひ熱い涙が頬を傳はつた。

空には清い十五夜のお月様がうるんだお目々をしたやうに、私共二人を見下していらつしやた。

暗を行く舟

本一 佐伯 花子

「向ふに灯が見える見える。あれが渡舟だらう。」と女中が言ふ。

「うん、あれが渡舟だ。今にこちらへ来るだらう。灯をつけてやれ。」

と女中のつれあひが言ふ。マツチをすつた。ぱつと消える。皆がよりあつてやつと提灯に灯をつけた。向ふの渡舟の目標としてやるために、渡舟はやうやく岸についた。私達はこれに乗つた。ばしやり／＼。小波は舟べりにうちよせる。風は着物の裾と戯れる。暗の中を灯が縫うて行く。あどはごちらをむいても眞暗だ。

なんとなく心細くて動悸がはげしく打つ。今この舟がひつくりかやれたら。あゝ、おそろしい思ふまい。舳に腰を下ろしてゐられた叔母様が突然。

「あれ向ふに眞黒なものが。」

「どれどこに。」

「すぐそこに。」

妹達はそれを見て、お母ちやん／＼と泣き出す。ほんとにその時は私までお母さんと言ひたかつた。舟は船頭さんによつて暗をなほも進んで行く。

「なにあれはときは島だい。」

と女中のつれあひは櫓の手を休めながら言ふ。ほつと胸をなで下した。川も眞黒、船頭さんも眞黒。すべてが眞黒な其の中を舟はなんの氣なしに進んで行く、艀の音も靜かに。

或日の朝

本一 久保田惠美子

うすきみ悪く、空はぼんやりと曇を見せてゐた八月十二日の朝であつた。其の朝は何とかなしにおちつき

がなく、物足りない氣が一ぱいで、勉強も愉快に出来なかつた。私は復思ひ出した。此の夏休みに訪れる事にしてゐた懐しい故郷の山や川の事を。

鉛筆を投げすて、今にも降り出しさうになつてゐる空を一心に眺めて、懐しい故郷の有りし日の事を様々と思ひ浮べた。あゝあの小さい短い橋の手前に、私の住みなれた家があるのだ。

今頃も其の下の小川は相も變らず、ちよろ／＼と音を立て、きれいな水晶のやうな姿で流れてゐるだらう。あゝ、あの川だつた。私が尋常一年の夏休みの時、お隣の勝ちやんと二人きりで、小鮒をすくひに行つたのは、そして其の時に、まだ買つたばかりの新らしい箆を流した事、其の上着物を濡らして、母よりお小言を貰つた事、又は其の川邊に蓆を敷いて、咲き亂れた鶏頭の花を折り取つて、お伯母さんごつこをしたものだつた。

すぐ其の先の、仲よしの末子さんのお家の事も有り／＼と思ひ浮んで来る。其のお家から一町ばかり先に私の通つてゐた學校がある。其の學校は明倫校の三分の一しかない。小さい學校であるが、高三まであつて

私に取つては一番尊く優しく感じられる學校である。校舎の後にはかなり廣い運動場で、皆快活に飛び廻はつたりした。秋の運動會もそこで行はれたことを思へば血が湧き胸が躍る様である。

「お、雨です、干し物をお入れ」と云ふ母の聲に、私は今まで止め度もなく追つてゐた、懐しい故郷の思ひ出の夢は破れた。あ、行きたい。もう一度母におねだりをして見ようと机をはなれた。

御留守番

本二 山縣 ユメ

此の間の日曜の事であつた。母は急用が出来て、俄に徳山へいらつしやつた。夜はいつも来るおぢいさんに來てもらふ事にした。そして明日……月曜日には歸られる事になつてゐる。午後二時四十分の汽車で歸るとおつしやつたから、學校から歸るまでには、きつと歸つてゐらつしやるにちがひないと思つて急いで校門を出た。そしてなるべく道も急いで、やう／＼私のお家の見える所まで歸つた。あ、!!今まで楽しみにして歸

つたのが、かなしみにかはつてしまつた。家は朝のまゝ、戸がしまつてゐる。まだ歸れないのだ。なぜ歸れないのだらう……。まだ四時四十五分の汽車があるから、あれで歸られるのだらうと思ひなほして家に入つた。

暫くして汽車の汽笛がなつた。今汽車が着いたにちがひない。さうするともうじきに歸りになる、うれしいなと思つて門に出た。もうあれから三十分もたつたのだから、お歸りになる筈なのに、なぜおそいのだらう。私は何度／＼も、人の足音のするたびに門に出て見た。けれども歸られない。仕方なく一人で淋しく御飯を済した。時間は遠慮なく過ぎて七時になつた。けれど／＼お歸りにならない。今日は母が歸られるときまつてゐるので、おぢいさんもとまりに來て下さらない。さうすると私一人。あ、どうしようか、早く歸つてゐらつしやればよい。もう外はうす／＼い。やがて時計は八時を知らせた。町から車をひいて歸る人もすくなくなつた。蟲の聲がさびしくきこえる。私はどう／＼淋しくなつた。あ、どうしようか。今夜もし歸つていらつしやらなかつたら——思へば思ふ程淋し

い。色々考へた末、私一人ゐてそして母が歸られたら自慢しよう。一人でこはがらすにゐたと言ふ事を……。私はかうきめたらもう淋しくなくなつた。それで電燈の下で本など讀んだ。

暫くして前の道で下駄の音がする。おや、今頃たれだらう。もしや母ではないかしら。下駄の音はだんだん高きこゑで來た。そして私の家へ來る様である。あ、たしかにお母さんだ。歸られた。うれしいと夢中に讀んでゐた本をおいてたち上つた。同時に玄關の開く音がして「今歸つたよ」と母の聲、私は今までの淋しかつた事など忘れて、留守中の事を母に語つた。

秋の野道

本二 吉村多喜子

赤く光つた草の實が折々裾にまつはるのに、心よさを感しながら、私は細い野道を歩いてゐた。恍惚する様な空氣の中に、ほのかな秋草の香と、爽かな草の匂ひの溶け合つたのが胸に流れる時、「秋!秋!」と私は幾度も胸の中に叫んだ。や、たれた芒の穂先にま

た赤蜻蛉の羽がきら／＼と光るのが又何となく美しい。取殘された様な雲の影のうつすらと落ちた草叢に、蟋蟀の鳴き聲が聞けて涙ぐましい悲哀を覺えさせる。雑木の茂つた並木道にさしか、るとほろ／＼と色づいた病葉が淡紫の袖口を掠めて散つた。

夕暮の空

本二 中原ユキ子

静かなる秋空に、ちぎれ／＼にただよひし浮雲は、西の方へ移り行きて、日は漸く傾きたり。

風も吹き絶へたる夕方の青空、暫くは水の如くに澄みて、天地ともに静かなり。

太陽は西山に近づくに從ひて、眞紅の色いよく加はり、まばゆかりし光漸く減じて、今やまさに沒せんとす。空は忽ち一面の繪となりぬ。

周圍の雲々まで一時は紅をあびせかけられ、其の色或は薄く或は濃く、變じて淡紫となり、化して鼠色となる。

日既に沒すれば、浮べる雲影、いつしか盡く消え、

たいこわんの夕暮

本二桂淑子

お湯の匂があたりをこめてゐる。

入日の名残が、美しく西の空を彩つてゐるのに、薄
 銚形の月はもう中空に淡く出てゐる。自然の美しい眺
 めにさそはれながら、西山さんと堤をそゞる歩きまし
 た。二人の足はひとりでにたいこわんへと向つた。さ
 うして中途から磧に下りて、川邊を辿りつゝ行つた。
 草の澤山生えてゐる中から、藤色の美しい花が彼方
 此方にのび出てゐる。白萩赤藤は今を盛りと咲き亂れ
 て、如何にも秋を物語つてゐるやうであつた。

私は白萩を一枝、藤色の花を二三本取り、それを胸
 に抱へて瀬の處に行き、清い流れに足を浸して、小聲
 で歌を口ずさんだ。

鐘橋の爲、あまりよく見になくなつた六本松のあたりを、二艘のボートが輕快に走つてゐた。たゞ一人釣棹をたれて、魚のかゝるのを待つ人もあつた。

そよ風の吹く度に、黄ばんだ櫻の葉は、音もなくはら／＼と、水の中に吸ひ込まれて行くのであつた。そこらあたりの草叢から、細い透き通る様な蟲の音が聞

あゝ、もう凡べてが物淋しさに引き入れられるやう

あたりが少し暗くなつて瀬の音はいよく澄む。

港での悲しいお別れの事が新しく胸に蘇つて來た。

本二松田
靜

棧橋の上に立つて堅く手を握り合ひ、「お体を御丈夫にね。」「有難う、あなたもどうぞ。」「お着きになつたらお手紙ね。」「ね、あなたもよ。」「いひたい事もお別れに臨んでは、述べたい言葉の千万分の一も言ひ得ずして唯絶間なく頬をつたふ涙を拭くばかりである。こんな所で泣いては—と思ひながら、やつぱり涙は止めどなくにじんで来る、いつまでも此の儘にと思ふ心にも、容赦なく出發を報ずる鐘は「がらんがらん」と鳴響いた「御機嫌よう、お丈夫にね、左様なら」と言葉を交しながら、私の乗つてゐる悪魔の様な巨船は別れを悲しんでゐる私達に情も無く白い泡を残して北へくと進んだ。私は一人甲板に出て、無意識にN様のお姿が消ぬるまでハンカチを振つた。けれどN様を見る事は出来なかつた涙に目が曇つて、生きてゐる間に再び御目にかかれないうちも限らないと思ふと、尙更悲しさが胸にこみ上げて来る。別れと云ふものはかうまで悲しいのでせうか。

南の空を眺めながら、過ぎ去つた日の思ひに耽つた秋の夜は、大分更けた。あたりは本當に静かである。一日疲れ果てた町の人々は、今安らかに夢路を辿つてゐるのでせう。安い疊表の庭下駄をひつかけて飛石づたひに庭に出た。月は物凄いい程青白く冴えてゐる。小さい星が眞白いすぢをひいて南の方へ流れた。今の星は、こへ落ちたのであらうか。私は一層淋しさを増した。お・N様御健やかに在しませ。而して再びお會ひする事をお祈りしてゐます。

水 兵

本二 佐伯文子

製絲會社の門の前に二人の水兵が立つてゐた。

私とMさんがその前を行過ぎようとする、一人が呼びかけた。

「嬢ちゃん、嬢ちゃん」「は？ 私にはびつくりして立ちどまつた。

「あそこに見ゆる銅像は誰の銅像ですか。私はどう答へたらいい、かめんくらつて、

「この會社の社長さんのお父さんでせう。」といった。「今日は學校はお休みですか」私がまだ答へない中に一人の水兵がいつた。

「夏休みぢやないか、あは、。」「あ、さうか、あは、。」「二人とも笑つてしまつた。私達二人も大笑した。そしてあわて、おじぎをして行過ぎた。少し歩いて私達は復顔見合せて笑つた。それから私達が松本橋の上で水兵の泳いでゐるのを見てゐると、さつきの人とは違ふが又二人の水兵が聞いた。

「この邊の水でも少しはしよつばいでせう。」

「はい、少しは。」

「どちらが上ですか、こちらですか。」と上の方を指さした。すると一人の水兵が、

「いやこちらでせう。」と反對の方を指さした。私は、

「い、ねこちらでございます。」と教へた。すると後の方の人は、

「おや、一本参つた。」と笑つた。向岸では五六人の士官らしい人が泳いでゐる水兵達を寫してゐた。

— 42 —

初秋の朝

本二 野村繁子

齒磨楊子をくはへ、タオルを片手に庭下駄を引つかけて、井戸端に出た。

此の間迄「おー涼しい」と思つた風も、思はず襟をかき合せる様になつた。

朝寝坊の鶏が今頃「こけこーろ」と一生懸命に鳴いて居る。

美しい色の葉鶏頭がびつしより露にぬれて、今出ようとする朝日を待つてゐる。

コスモスも、もう蕾を孕み丈も餘程伸びて、いつの間にか私の丈を越してしまつた。

西の空には、昨夜の月がほの白く、太陽の光をはかるかの如く、淡く姿を見せてゐる。

そこの橙の木には、夜露の名残を止めた玉が日の光を受けて、きら／＼と輝いてゐる。

そして時々風の吹く度にばら／＼と地上に落ちる。時計の音が「ちーん／＼」と響いて来る。

何時かしら。

もう弟や妹の聲も聞え出した。我が名を呼ぶ母の聲に急いで家に入りかけて、今一度美しい／＼葉鶏頭を見返つて見た。

葉鶏頭やどろし露のきら／＼と朝日をうけて五色にぞ見ゆ。

夏の暁

本二 村田貞子

あたりは未だ薄暗い。静かに着物を着かへて庭に出た。草木は皆夜露に濡れてゐる。大分露が深い近くのボブラも半から上は薄い白絹に包まれた様である。頻りに鶏が時を知らせてゐる。

露の玉が葉からこぼれて、地上にほたり／＼としみて行く。花壇の花は皆昨日の萎れしをれた様子は全くなくなつて、夢の様な露の中に、ほつかりと浮き出でゐる。今まで一面灰色におほはれてゐた空はだん／＼青空がのぞいて來た。牛乳配達ががら／＼と勢よく走つて來た。雀が一羽、向ふの屋根から我が家の屋根をこして、彼方へ飛んでいつた。

何處かで汽笛が鳴つてゐる。もう凡ての人の目覺める時なのだ。空もだん／＼明るくなつて來た。方々で雨戸を開ける音が聞える。東の空がぼう／＼紅に染つた半弦の月は微に空に残つて今にも消え去らうとしてゐる。灰色の雲はもう何處へいつたか影もない。お寺の屋根の向ふから明るくなつたのだから、多分彼處から日が出るのだらうと思つて見てゐると、ぼつ／＼輝い光が四方へ散る。いよ／＼日の出だと思ふともうまぶしくなつて來た。出た／＼眞赤な日が、さう／＼望みの満ち／＼た朝は來た。

お洗濯

本二 西山 初枝

日當りのよいお蔵の前に、鹽を持出した、てるさんは面白さうにびちや／＼と白い泡をたたせて、頼りにお洗濯をしてゐます。

時々だるいと思つて、襷掛のほつそりとした體を仰して深い息を漏し、復しやがんでほちや／＼とやつてゐます。

秋の夕

本二 小田 文子

かうしてやつと洗へた時、高くもない體を中腰にしてじゆう／＼と絞り、藏の横手の物乾竿に運び、やがて着物は赤い小さな手によつて干されました。小さいだけに力が足りないと思つて、干すに直ぐほたり／＼と雨だれの様に雫が落ちます。

鹽の中の泡を浮べた黒くにびつた水は、ざ／＼と流されました。

何處の家を見ても皆忙しうな黄昏どき、人々は皆それ／＼一日の仕事を終へて、楽しい／＼我家へと歸つて行く。町の夕、それは何となくざわめいてゐるが郊外の夕は、人の心をのんびりとさせる程靜かだ。私はいつも夕方になると、弟を車に乗せて野原の方へ行く。あたりははや薄暗くなつて、太陽は西山に傾き、西の空は夕やけで眞赤だ。明日も多分お日和であらう鳥は啼をさして飛んで行く。農夫も仕事を済してぼつ／＼と歸る。此の間の大風で白穂まじりになつた稻は

風が吹く度に黄金色の稻と白色になつた白穂が、いりまざつてゆ／＼のれる。

山も所々色付いて見える。向ふの方を見渡せば、竈の煙がな／＼と風に靡いて紫色にうすれ行く。その内にぼつ／＼點つた電燈の明りが、木の間隠れにちらり／＼と見始め、時々町の方から喧しい自動車の警笛が、夢の様な静けさを破つて響いて來る。

九大醫學部解剖室

本三 和田 久

兩側をガラスで張りつめた廣い廊下は、我が國最高學府の威嚴を保ちながら、はるか彼方へつゞいてゐる見事に磨かれた床の上を、案内して呉れる親類の兄に導かれてその後につゞいた。ふと立ちどまつた兄は片手で軽くドアをおして這入る。急に狭くなつた廊下は復も長く延んでゐる。ずつと突き當つた所に、大きくがらんとした室があつて、戸口の上に解剖室と記した札が下つてゐる。兄はすた／＼大股で室内に消れた。私はそつと戸口から覗いて見る。多くのガラスの戸

柵には頭蓋骨肋骨手足等人間一通りの骨や、瓶漬にした筋肉が整頓してあり、この室の南隅には五六人の學生さんが熱心に仕事をつづけてゐるらしく、一種の冷やかな空氣が漲つてゐる。

兄がその傍に立つて呼んだので恐る／＼近よる。

皆の前のブリキの解剖臺に廣げられたものを見た瞬間、思はずぐりとして全身が引き締まる様に感じた。あまりの想像以上の状態に呆然とせずにはゐられなかつた。學生さん達は全部消毒服に包まれ、口にはマスクをかけ、熱心に銀色に光るメスをふつてゐる。

メスをすぶりと、筋肉に刺すと蓮の花の様に切り開かれる。そしてそこにでて來た部分を厚手の書の圖解にいち／＼忙しうに見較べる。指に淡黒い血がつき爪は黄色にかはつてゐる等はまるで無感聲の様に。丁度脚の解剖らしく、ずつと下の方に足が見える。足首の所に堅く縋帶がしてあり、そこから足の指にかけては表皮がそのまゝになつてゐて、普通の死人の足である。表皮が剥れてあらはになつた筋肉は、最早血の氣は失せて、氣味わるい紫色を呈してゐる。

その筋肉の間を木綿糸大の白い神経が蜘蛛の網の様

に密に通つてゐる。隣の臺の上には手の解剖らしく、やはり表皮のない手が空を掴んで動かないのは物凄いですべてが生理衛生の模型と變らない。唯柔いのみである。

「これはどこから来たんですか」

「これ！これは刑務所で一週間前に死んだのを先生の特別の御好意によつて戴いたのです」

この會話をそばで耳にした私は、今更罪を犯すことの恐しさを知つた。世間には「自分の死骸を研究の材料にして呉れ」と遺言する奇特な人もあるが、刑務所の罪人の如く、この世では社會の人々から「なんだ前科者ぢやないか」とののしられ、死んでもあの世で地獄とやらで苦しみ、あまつさへ靈の去つた冷たい骸まで人々の前に醜くさらけだされる。なんといふ痛しい人生の記録であらう。

私は刑務所のあるといふ、南の空を涙た、へて見つめずにはゐられなかつた。

赤ちゃん

本三 佐方君子

「あらつしやい」といつて、

「そして何もなければ、これでも食べて待つてゐらつしやい、ほんとうに好くゐらつしたのね、あつい中を……、あつかつたでせう」といひく見事な菓子的美しく盛つたのを出された

「あらそんな事なすつちや困りますわ」と私も人並に挨拶をする。遠慮のない仲だけど、久しぶりに逢つたので少々氣兼ねである。

「それよりもお姉様、赤ちゃんを拜見させて頂戴。」

と切り出す。嬉しさうな顔を一層くづして従姉は、
「そんなに早く見たいの、ぢやあ抱いて來ませうね」
私は自然に上つて來る微笑みをおさへる事が出來なかつた。

「ほら好く肥へてゐるでせう、まあ抱いて御覽なさい、重いから……」にこ／＼して如何にも母親らしい慣れた手つきで私に渡される。

「まあ可愛いのね、全でお兄様をつくりよ、この頬の柔かいこと、黒い髪ね、私のと取りかへてもらひたいやうだわ、お姉様、男の子？ぢやあら、私忘れちゃつたわ、男みたいな顔つきね。そして名は何ていふの、誰

「お姉様、赤ちゃんが生れたつてね、お知らせがあつたから飛んで來たのよ、お目出たう」と汗ばんだ額を拭き／＼門まで出迎へた従姉にいつた。

「まあ好くいらつしたのね、來るつていふ事は分つて居たけど、まさか今日だとは思はなかつたわ。さあお家へ行きませう、お兄様も直き歸られませうから、赤ちゃんを見て頂戴可愛いんですよ」未だ見ぬが可愛い赤ちゃんといふ名にふさはしい赤い顔や、紅葉のやうな小さい手など想像しながら後に従つた。玄關の格子戸をがらりと開けたが誰も出てがない。

「伯母様は？お姉様」と問ふと、

「さあ、今ちよつとそこまでつて出られましたがね、直き歸られるでせうよ、どうぞ御遠慮なく……」

「ね、」と兎に角座敷に通る。大分色づいて來た庭の紅葉や離の二階を壓するやうにして居るオレンジ色にうれた柿など見て居ると、後の襖が音もなく開いた。

「あら！」といつて振り向くと、ほんのりと顔を上氣さした従姉が這入つて來た。あわて、前なごかき合すと笑ながら、

「そんなにあらたまらなくなつて好いのよ、樂にして

が附けたの。嬉しかつたでせう。伯父様はさう喜ばれたでせう、そして伯母様も、お兄様も、亡くなつた靖ちゃんの変りに生れたのね、嬉しいでせうお姉様。そしてお兄様……」

「まあ好くしゃべるのね、君ちゃんは、姉さんは何が何だか些つとも分らないわ。もしのつくり話して頂戴。君ちゃんの話は全で飛行機のやうね。」

「あら御免なさい、だつて嬉しいんですもの、名は何ていひますの。」従姉の言葉に、嬉しさに夢中になつて居た私は少しゆつくりいつた。

「名前？夏生れたから奈津子ですつて、お兄様がつけられたのよ。嫌だつたけど仕方がないの、我儘なんだから……」従姉の顔には不平さうな色が流れた。

「あら女ですの、私男かと思ひましたわ。奈津子つて平凡な名前ね、でも悪くはないわ。ではこれから奈津ちゃんと呼ぶのね。男でなくて伯父様達は少しお力落しでせう。」

「い、ね、さうでもないのよ。母様がたゞね、此の子が男なら、復讐と附けるつていつて居られたけど、女ですからね。女に生れたものを今更男に生れ變りはし

ないし、ほほ……、いくら母様だつて孫に變りはないわ。私も男なら好いと思つてるけど仕方がないのよ」
「さうね、でもい、わ。こんな可愛い赤ちゃんですもの。奈津ちゃん大きくなつたら、お父様の後つぎをして、テニスの選手におなりなさいよ。」
「ほほ……君ちゃん、今からそんな事いつて……」
「だつてほほ……、少し早いわね、ほほ……」
「ほほ……」賑やかな笑ひ聲がすつと奥庭までもこだまして響く。
赤ちゃんを中心として、四方山の話がひっきりなしに續く。ちよつとそこまでだつた伯母様は未だ歸つてゐらつしやらない。少し斜だつた松の木影は、すっかり斜になりきつて居る。不圖傍の菓子皿を見れば、いつの間にか空になつて居た。

其の夜の不安

本三 長谷 富美

激しい風が吹きつける毎に表の戸や脊戸の戸が氣味悪くごとくごとく……鳴る。

ある筈の母がかすれた聲で何か云つた。

「氷をとり代へませうか？」私は尋ねた。

「火を用心おし」母はそれだけいふと復目をつぶつた蒼い顔。瘠せたその額にぬれ毛がはらり。そこぼれていたくしい。電燈はまだつかない。女中も眠つてしまつたのか、ひっそりとして音と云ふ音はみんなかきをひそめてゐるやうだつた。闇にはびこる悪魔を追ひのける明るい火はまだつかない。更に一分！二分！私はちよつと體中火になるやうに力を入れてゐた。やつと、やつと電燈がついた。ほつとして時計を見ると十一時少しまではつてゐる。もう返電がありさうなものだ。又もや私はぢり／＼して來た。今朝見た新聞の文字がはつきり頭に浮ぶ。萩に吹いたあの暴風が矢張り臺灣を襲ひ兄のゐる宜蘭も、荒らされたらしく、宜蘭地方の慘害とか、百五十戸倒壊とか云ふ文字が實に悲しいおそろしいことまで想像させる。

あ、返電が早く……併しそれで更に悲しいことを知るやうになつたら……。病む母の顔を青い蚊帳越しに見つゝ、とつおひつ考へてゐる時、表の戸をはげしくたたく音がきこれた。

雨はます／＼降りしきる。風も少しもその勢をゆるめない。眞暗い外の闇と物凄風を想つただけで私はふるつとふるへた。

悪魔がどこかで哄笑してゐる様な晩だ——人間が怖え切つてゐるのを見て、きつと彼等は彼等の求める闇に行き當つた喜に、舞ひ狂つてゐるのではあるまいか？ ふつと目前をその悪魔が通り過ぎたやうな氣がして、私は思はず飛び上つた。途端電燈が消えた。「停電と思ふと私はすぐ眼をつぶつた。暴風の夜の幻と悪魔の哄笑がきこえる様な氣がして、私はどうにもそのまゝ、ちよつとしてゐることが出来なかつた。而も電燈は二分三分！ 四分！ 過ぎてもつかない。

自分から作つた恐ろしい幻に自分でおびつづけるに堪へられなくなつて、つと立ち上ると手探りに蠟燭を取りに行かうとした。そり／＼と机の方に近寄つた。まだ火はつかぬ。やつと蠟燭が見つかった。次はマツチだ。あつた！ マツチの箱も割に早く探りあてた。併しマツチを擦らうと箱を開けた私は又ひやつとした。唯二本唯二本、しかないおそろ／＼それでも一生懸命にしつとマツチをすつた。やつと火が點ると眠つて

「はい」と云つた聲は喉に引つか、つてゐるやうだつた。

やつと電報を受つた私はそれをあけるのに又ためらつた。けれどもさうして長く居ることも出来なかつた。指先に全身の力をこめて開いた。「ブジ、ヒナンスハセ」あつ無事だつた。あ、兄は避難して呉れた。嬉しい……私は電報をみつめていつまでも立つた。

助かつた、無事だつた……はつきり今一度自分の心にいひきかせた時、始めて嬉しさで安堵の涙が熱した頬にどめどめと流れた。

秋は来る

本三 末岡 ハナ子

秋！

秋が來ました！

秋は詩人の泣くべき時と云ひます。しかし詩人でない吾人も亦秋は悲しうございます。

或人は笑ふべからずと言ひました。凡俗にも一片の詩情はあります。晴れ渡つた空に眞綿の様な白雲を見るとき、あのひがん花を思ひ出されま

す。西空を赤々と染めてゐた夕映も消れて、何處も同じ秋の夕暮は寂しうございます。強ち良蓮法師のみが哀愁寂寥を痛感せられたのではありますまい。天高く清く冴え返つてゐる空に弦月、小搖ぐ群星皆自然の詩に外ならないのであります。秋の淋しさを夢とせせず、愉快に笑ひさぐめてゐた夏は、早や逝つてしまひました。松の疎林の梢を、渡る微風の觸音も詩を囁き、夕露を帯びた叢にすだく蟋蟀、鈴虫皆秋の詩を歌つてゐます。鳥の聲、水の流、風にもみぢした木の葉、總て秋の來たことを知らせます。けに秋が來たと目にはさやかに見られませんけれど、風の音に四方の景色にも驚かされます。

秋

本三 進藤美穂子

もう秋になりました。
冷たい風が微に言たてて梢に訪れます時、たまらなく淋しさにおそはれます。

さうして秋はさびしいのでせう。私には唯惱しく涙ぐましく過ぎし日の思ひ出が繪巻物のやうに胸にうかんでそのすべてがなつかしめます。けれども結局はさうした悲哀の中に泣きぬれた私の心のこの思ひ出を遠く諦の國へと送つてしまふより仕方がありません。人の世に輝く美しいあの榮光も、やがては短い幻と消え果て、はかない涙と共に色あせてしまふのです。あ、夜毎／＼に消え失せぬ憂にとざされたこの胸の扉を、さうして神様はひらいて下さらないのでせう。でも、今宵のやうに星の輝く空には、私達の永遠の道をひらいて下さるやうに思はれてなりません。はるかに聞える千草にすだく虫の音も、秋の夜のかうしたやる瀬なさには一層哀れさを感じさせられます。かうして、幾度も幾度も秋が訪れ明けられてゆく中にはやがて乙女の日も逝つてしまふ事とせう。

舊友の訪れし日

本三 横木房子

「試験は後一日で済みます。それも私の好きな講讀と

文法ですから、他の學科の様に心配しなくても済むと思ひます。其の上今日は眞個に嬉しい日でございますそれに對しては、あなたも屹度躍り上つて喜ばれるでせう。

それは此の夏休みに故郷——萩町——あなたの處へ歸る事を母より許容された事です。お寺参りかたぐい。

嬉しいでせう。私とあなたとの一大福音でございますね。多分歸郷するのは夏休みが始まつて直きでせう。連れが有るのですからよく定りませんが。」

さつと此の意味の手紙が七月の或日、私の舊友の子さんからきた。丁度試験の始まる眞近の日だったの

で、目前に控へる試験を思へば躍り上る程嬉しく無い夢にも幻想にもあらはれない人だ。訣れてから九ヶ年

——尋常一年生の時——なので、容貌も既に判然としな

つたので、暫く待たれたさうな。
私もいらつしやるだらうとは思つて居たけれど、三秋の思する程にも無く、早くて明日、遅ければ未だ二三日先かも知れないとは考へて居たけれど、今日の今日とは些とも思つて居なかつたので、至極悠長にお稽古をしゆつくりした歩調で歸つてきた。
家に入らんとすると矢庭に妹が飛んで來て、私への來客の旨を告げた。「誰か知らう。もしかしたら子さ

んぢや無いかな知らう？」啾啞に斯う推察しながら家に入つた。

今三分と経たない中に、九ヶ年昔のなかよしに逢へるかと思ふと、流石に心のときめきをおぼれた。

襖の蔭に來た時、友の前に出るのが一寸躊躇はれた思ひ切つて子さんの前に出た時には、懐しい何年か振りの微笑が交された。私の歸る迄子さんの御相手を

をして居た祖母は、此の時座を退つて臺所に往つた。「お久闊しうございます。」「お久闊振りでございます。長らく御待たせして済みませんでした。」「些ども。」

萬感交々至り、二人とも言ひ度い事は山の様に有るのだけれど、嬉しさで恥しさで、只凝乎としてゐた。

C 子さんはふつくと肥つた指を、度しく卓子の上に置いていらつしやる。時々顔を上げて視線のちか合ふ刹那其處には、お互にもう幼い子供で無くて、十七と云ふ若い女―乙女―ブライムになつたと言ふ事を領かせた。臍、耳の形、頤から頬にかけての線、思ひ出せば小さい時の面影が一つ偲ばれる。

彼女は青磁色の薄物に、ローズに紅味の加はつた地色にセピアの入つた精緻な更紗模様の夏帯を胸高に締め、昔の如く艶やかな烏羽玉の黒髪をお下げに結び、動作、言葉遣に於て、都の少女、美しい人、自分見たいな僻阪の乙女とは乾坤の差だ、を感ぜしめた。

二人とも沈黙を弄と抱擁して破らうとしない。臺所で母と祖母の食器を扱ふ音が聞える。

お互に口を噤んで居るけれど嬉しかった。心と心とが蟠り無く溶け合つて、時々思ひ出した様な微笑に互にそれと知らし合せた。

二人の大切にして居た沈黙を破つたのは、C 子さんへの饗應物を運んで來た母と祖母。でも私等は些とも悲しいとは思は無かつた。却つてクライマックスに達して醜く倦厭するのを止めて呉れた母と祖母に對して

有難く思つた。二人とも沈黙の成功を喜び合ふ爲に軽く北叟笑んだ。

其の日は余り暑く無かつたので午過ぎて、案内する目的で、又歩き乍らゆつくりと幼き日の記憶を呼び起す目的で眩む様な日光を洋傘に受け乍ら少し遠いけれど、公園、K 濱に散歩に出掛けた。

公園内の櫻木の下のベンチに腰を下し、木の葉洩れて輝く光線を洋傘でうけ乍ら、暫く憩うた。

「ね、其處の山は S 山つて言ひましたわね」「ね、」

S 山―公園内に有る―六七才の頃秋に成つて椎の實が落ちる頃、祖母等と椎の實を拾ひに來て、二人とも暫く拾つて倦きると銘々自分の方が多し、と頑張り果ては喧嘩になり、揚句に二人とも大きな聲で泣き出したりした。其時時には祖母が惶々しく私等の傍に來て、

「喧嘩するもんぢや無い。何方も多い。」と賺したが二人共中々泣き止ま無かつた。泣いた所が何處だつたか二人とも記憶しない。併し其の時の情景は依稀として思ひ出された。

て思ひ出された。

K 濱に出た時、K 軍港の濁つた海許り見て居られる C 子さんの口から白砂青松の感歎詞が、しきりと洩れた。

遙か蒼穹の水平線と合する邊り、眞帆片帆の遠近に漾ひ、なごやかな油の様な紺碧の海を遠く、驚く程遠くに向つて、抜手を切つて行く若者の腕の潑刺さ。汗では憔悴した子供が戯れ遊ぶ。K 濱の午下りは長閑で有つた。

亭々と續く磯馴松の蔭で、濱風に汗を拂はれ、纏て歩を返した。此の爽快な水の饗應が C 子さんを如何に喜ばしたか！私も眞個に嬉しかった。

追憶

本三 堀上 重

追憶は限りなく美しく、悲しく、淋しい。
追憶は小猫のやうに、胸中にしのび足にのぞかうとする。

追憶の限りなき美しさ、悲しさ、淋しさ……。

秋の日はからりと晴れて、白い雲が軽く浮んでゐる。

初夏の日の午後であつた。

(しかしその初夏は十年前の初夏。)

私は鉛筆をかちつて、さつきから焦れてゐた。

私の側には、まだその頃若かつた母がお針の手をせつせと運んでゐた。

私は又母を呼んだ。もうこれで三度目である。

「まだ書けないの、仕様のない子ね。」

そんなにぐぐぐしてないで、よく考へてごらんよさいな、考へずに出来るものつてありはしませんよ。」

私の方へ優しい顔を向けてさういふと、復元の姿勢に歸つて、せつせと針を動かした。

「だつて、いくら考へても出来ないんですもの。私もう綴方なんて、一生上手にならないからい、わ。先生つていやな方ね、いくら考へても、出来もしないことをして來いとおつしやるんですもの。」

私がいくら鼻を鳴らしても、母はもう何ともいつてくれなかつた。仕様こそなしに、私は復机によつて出

された題、初めて一年生になった時を、も一度考へ始めた。

それは初夏であるから、一年に入つてまだ二月位たない或日であつた。學校の綴方の時間に、先生は綴方の説明をして、ありのまゝを書けばいい、んですから今度の時まで書いていらつしやいといはれたのであつた。

學校の宿題は、すぐやつてのけてしまふ癖の私は、この始めての綴方の宿題には、すくなくさ惱まされた。何といつていゝかわからないのである、始めから何にもわからないのである。それで私は母をこまらせてゐたのであつた。

私が又母を呼んだので、母はさういふ我を折つて、「それでは始めだけをいつてあげませう。あなただつて、いつもお話してゐるでせう。あんな風に書けばいいのです。」さうして私に鉛筆を取らせて、紙の上に私のいふ事を書けといつたので、私は一所懸命母の口から出る言葉を待つてゐた。

私は毎日いつもお家で、遊んでゐました。でもこの四月から、學校に行くことになりました。その時私は大

變嬉しくてたまひませんでした。」

さういひ終つた時はあの様に書けばいいのです。むづかしいことなんか、一寸もないぢやありませんかといつて笑つた。その時私の頭の中に何か掠めて通つた。さうだ、この言ひ方はまづいい!! 自分で作らう。これはお母様の綴方である。私は私の綴方を作らねばならない。私は急に鉛筆を握りしめた。さうして何と書かうか一寸考へた。

やがて瞬間に紙に書かれた言葉——それは私が私の生涯を通じて忘れる事の出来ない、私の始めての綴方の言葉なのである。

「ホリカミサン、ホリカミシゲルサン。オヤ。

アナタデスカ、センセイハヤトコノカタカトオモヒマシタ。センセイニワラハレテ、シロイヌノヲヒダリノカタニツケテモラツタトキノウレシカツタコトワタクシハウサガワセンセイガ、ダイスキニナリマシタ。」

たつたそれだけ!!! たつたそれだけ!!!

本當にたつたそれだけであつたしかしたつた。それだけの言葉が、宇佐川先生に私の母に實作か、どうか印

を押してくれといふ手紙を書かせた。私を宇佐川先生の前に呼ばせて、とてもほめさせた。お母様に、新しい鉛筆とノートを買はせた。

何と言ふ不思議さであらう!!!

さうして又何といふその頃の、私の純真さであらう。私は涙ぐましくなる。

◆ ◆ ◆

お正月が来て、私が二年に進級した。大好きな宇佐川先生も、遠くの廊下の方へ行つてしまはれた。新しい若い先生が私の先生となられた。

さうして夏休みが近づいた。皆放課後残つて遊んでゐた時、先生が讀本の一冊おしまいのならはぬ所を讀んでみる、といはれた。なすのよいちといふのが一番終りであつた。

「こゝをうまいこと讀んだ者には、先生が御褒美をあげる」と若い男先生が笑はれた。すつと前にゐた藤田といふやんちや坊が、

「先生、僕讀めます」とつつ立ち上つた。

「ようし、そんなら讀んでみる。」

「第二十三課、なすのよいち (一)」

屋島のた、かひに源氏は岡、平家は海で向ひあつてゐました時、平家方から舟を一そうこぎ出して來ました見ればへさきに長いさを立て、そのさをのさきには、ひらいた赤い扇がつけてあります。」

藤田はすら／＼さうまく讀んだ。先生はにつこり笑つて、綺麗な紙のカードをほらさういつて藤田の手に渡された。皆の眼が一齊に好奇と羨望とに輝いた。次々に多くの男の子が立つてよんだ。よく出来る女の子も立つてよんだ。

私はどうしてもさうまく讀めるといふ自信がなかつた。どうしても立つ氣がしなかつた、皆のよく讀めるのが悲しかつた、うらやましかつた、カードが欲しかつた。しかし讀めなかつた。

私は無性に悲しくなつて來た。自分が悲しかつた、人が悲しかつた、先生も悲しかつた、皆のものが悲しかつた。涙がほろ／＼と黒く塗つた荒けづりの机の上にこぼれた。私は顔に手をあて、しやくり上げて泣いた。

手と手との間から、あつ／＼涙がほろ／＼といくつもいくつもとめどなく落ちた。

◆ ◆ ◆
夏休みがすんだ。

活々とした顔をした友達が皆九月一日に集つて来た。教場に入つた時、もう鐘がなつてゐたのに、一つの机が空いてゐた。

重枝さんだ、私はふとさう思つて後をみた。遅参してらつしやるんぢやないかと思つて幾度もいくども後を見た。

先生の新学期に對する注意のある間もどうしても心が落附かなかつた。重枝さんが戸の陰にかくれてゐて恥しがつてよう入らないのだと思はれて仕様がなかつた。先生の話半、とう／＼立つてつか／＼と後に行つて戸をあけてみた。

誰もゐない。

きよろ／＼と二三度外を見まはして誰もゐないのであきらめて中に入つた。皆と先生の眼がこちらに向いてゐた。

「どうしたの、誰か来てた？」

先生に問はれて、私は眞赤になつて答へた。

「重枝さんが何だか、後に立つていらつしやるやう

な氣がして……」

先生の顔が一瞬間はつと變つた。唇がびく／＼とふるへた様だつた。さうしてそのふるへた唇から、ふるへた聲がさても變調子に飛び出した。

「皆さん、先生は忘れてゐました。重枝さんは……、重枝さんは皆さんが夏のお休みで遊んでゐる時に、病院で亡くなられました。もう皆さんと一緒にあそぶことは出来ません。重枝さんは亡くなつたんです。」

先生の聲はあやしくふるへてゐた。私は重枝さんの、一つほかんとあいた席を眺めながら、また、きもせずたゞほかんとして立つてゐた。

重枝さんは女の子であつた。白い可愛い女の子であつた。彼女とは、方角も西と東と違ふし、又どちらからも話し合はうとせせず、用事以外には口をきかなかつた。それならさうしてあの様な一種不思議な感じにうたれたか……。それは今の私にだつて分らない。到底一生か、つても或は分らないかもしれない。

— 0・0 —

わかれ

本三 山下悦子

今までさうまで兄を思はなかつた私も、昨日は妙に兄の側を去りたくなかつた。兄はなつかしい故郷を後に、上京しなければならぬ身であつたのだ。

今まで代敷を教つたり、英語をならつたりしてゐた兄が去つた後、自分はどんなに淋しく暮さなければならぬかと思ふと、いやが上にもなつかしさは増すのである。

一番末の弟が「兄さん行つたら、きつとおもちやを送つておくれよ」と今母に兄が立つと言ふ事を聞いたらしく馳せて行つていつた。い、よお前にはね、うんと送るよ」いつもなら嬉しさ一ぱいで言はれるのに、その聲の中には隠し難い悲しさがつ、まれてゐた。

時計の針は憎らしい程早かつた。はや午後六時半を示したので、皆は驛に急いだ。道々兄と仲よしの弟は「僕兄さんが居なくなるの淋しいなあ」兄はその時ふとふりかへつたが、何もいはずに涙ぐんでゐた。

七時何分か汽車は轟々と音をたて、近づいた。

「体を大切にするんだよ」父は只これだけを兄に與へた。「はい」とかすかに返事をして兄は汽車に乗つた。

母は泣くまじ、そこらへてゐた涙が一度に溢れたらしく、顔をそむけて、何もおつしやらなかつた。「兄さん御体を御大切に」私もこれしかいへなかつた。弟は「僕も行きたいなあ」つて言つて、快活な顔を曇らしてゐた。

一分！それはほんとに瞬間であつた。汽車はすべての見送り人を殘して、白い煙を後に去つた。

日ははや西の端山にかくれて、只薄暗い中を汽車は行くのであつた。私たち四人の中には、しばしの沈黙がつづいた。四人が驛を後に歸りかけた時には、はやあか／＼と電燈は輝いてゐた。

母

本三 林 光子

あ、母様なればこそ……、他人がお世事にもい、とはいつてくれないこの私を……。

一にも光子さん、二にも光子さんと、何につけても

かはゆくつてたまらないらしいあります。

あ、母性の愛とはいひながら、これ程の母を持つ人はおそらくないでせう。母として子供を愛せぬものはないとおつしやるでせう。母として子供を愛せぬ人はありません。けれど、私の母様から受けますそのものは、筆にも言葉にも表はすことが出来ません。私は産れて落ちると、すぐに受取られ、そのやさしい手で育て上げられました。幼いときは一度だつて人の手にはおへなかつた茶目私がかはゆくつて、怪我をしないやうに、い、子になる様に、無駄と人に後指をさ、れないやうにと、それは／＼心配して下さいました。

さうした母様をもつて居ながら、何時も／＼人のあそばかりついて何一つ出来ず、何とて人に勝るものはありません。やさしい母に育てられ小ながらも、氣のあら、情一つも知らない淺墓な私。しかし母様には濟まないといふことだけはよく知つて居ります。

或にはか雨の日、母様が私一人でとぼ／＼とかへつてくるのを見られました。何時も一緒にかへつて貰

つて居たお友達は、自動車で後から私を追ひこされました。私は黙つてそれを見ました。母様もそのとき見られたのでせう。かへつて見ますと何時もと變りなく私を待つて居て下さいました。

「よくかへつて来ました。一人でした？ 淋しかつたでせう。今度病院に行くときはあれよりよい自動車に乗せて上げますよ。さあお菓子もあります。Kお姉様からお便りも来て居ります」

突然やさしい言葉があたへられたので、涙があやうく溢れ出ようとしたのを、ちつとおしこらへてセルの單衣に着かへた私は、母様と一緒におやつを戴きました。

あ、私も體も丈夫になり、あの方達の様に盛に運動することが出来、何かさうどころのある私であつたら、せめて母様のお慰みでせうに……。

舊師に送る手紙

本三 川村清子

先生。

最早秋もたちそめました。こほろぎは夜ごとに聲をかぎりに鳴いて居ります。先生其の後如何お暮し遊ばされますか。お伺ひ申します。次に私もお蔭で無事學校に通學致して居りますから、御安心下さいませ。

月日の過ぎ行く事は眞に水の流れる如く、先生と悲しいお別れ致しまして早六ヶ月も過ぎ去りました。月日の立つにつれて、先生のお懐はしは日毎毎に増して参ります。

夏の暑い日も冬の寒い日も、おいとひなくお導き下さいました御恩は決して忘れは致しません。あの朝夕なれた運動場、思ひで深き國語教室を後にして、轉校致しました私は悲しくつてなりません。でも今は學校の様子もよくわかり、友達もできまして日々楽しく勉學致して居ります。御安心下さいませ。

もう運動會も近よりました。多分十月にはございませう。去年の今頃は先生と一緒に日の暮れるのも忘れて足のいたくなるまでダンスをしましたが、今年は夢に見るより他はありません。

友達より聞きました。お世話になりて居りました校長先生がお亡くなり遊ばしたこの事、夢かさばかり驚

きました。なんとした因縁でございませう。あのお若い先生が死なれるとは。お葬式にも行く事もできず、

遠方から先生の御佛壇の方をむいて拜んで居ります。三年の皆様によりしくお傳へ下さいませ。皆様にお手

紙出さなくてはなりません。常々からの私の筆不精でございしますから何度も書きかけましたが、つひ心ならずも御無沙汰致して居ります。

私は先生の御教授下さつた事をお手本として勉強致す心がけであります。それではさやうなら。

田舎者の都行

本三 山本禮子

此の夏私は叔父と、東京の叔母につれられて、久しぶりに都見物に行きました。小さい時に一度汽車に乗つたきりの叔父の、汽車中のをかしさ……。まあそれはそれとして、長い旅もやつとあきた正午頃やつと憧れの東京に着きました。驛には叔父さん達が出迎に來てゐて下さいましたが、私達が降るとすぐ「やあ田舎の田舎者がやつて來た。東京の人を御覽そんな風をし

てゐる者はありませんよ」といつて大笑ひされました
私は恥しくて、叔母に縋りつきました
今度は叔父さんに、「どうだね、田舎の驛ごちら
が立派なか」なんてからかはれる。

家におちつくやうな氷をとつて下さる。近くのお湯
に入りに行かれる。まあなんて便利な事で御座いませ
う。お湯に行つて歸られた叔父さんにどうでしたと聞
きましたら、どうして入つてい、のかまごついたので
東京の叔父さんのまねをしました。このことでした。
私でも元は東京にゐましたが、今はまるで反對です
から何につきかにつき、恥ばかりかいて居ました。

二三日して各呉服店に叔父を連れて行きましたら、
まづエレベーターを始め、一々驚いてばかり笑はれ通
し。中でも屋上庭園の装置です。その時家に歸つて今
日はづつてんこへ上つて屋上庭園を見て來たと云はれ
た時、づつてんこがをかしいと復お笑ひ。

町を連れて歩いて、きよろ／＼してあぶなくつて
たまりません。電車へ乗ればひよ／＼本當に氣が氣
では有りませんでした。

でも終り頃には一寸とした近く位は、一人で電車に

乗れるやうになりました。それでも眞中の尾張町はま
だまだあぶない様でした。
色々の雑誌にもあります通り、それは滑稽なもので
した。家に歸つてからも叔父さん一人得意になつて都
話。それには第一國技館の巧みなそなへつけのお話。
それを聞くお祖母さん達も一生懸命です。「本當にま
あ」位で、お父さんは一人くす／＼笑ひ。
これで都見物もやつとこさで終りをつけました。

兄に

本三 伊藤基美

兄さん、市にゐらつしやつた時の御模様を旅立た
れたあとで、すつかり御祖母さんに聞いて泣いてしま
ひました。今年のお正月は割合にい、年だつたといふ
のを讀んで私は胸が迫りました。

お父さんお母さんの居られない今、私共の一番たの
しいお正月、おやすみを兄さんと一緒に迎へる事が出
來たら、どんなにいい事だらうと何時もさう思ひます
お祖母さんもさういつて涙してゐらつしやいます。お

父さんお母さんと呼んで、來る日も來る日も楽しく幸
福に迎へた過去の日、私はたまらなく懐しくなります
いくらあせつてもがいても永久に歸らぬ過去なのです
が、忘れようたつて忘れられませんか。殊にこの頃は夢
にでもと思ふ事があります。

此の間お祖母さんがゐらつしやつたので、兄さんから
のお便りを讀みましたら、泣いてゐらつしやつた。年
をとられたお祖母さん、お父さんお母さんの逝かれた
今は、この私共をどんなに期待してゐらつしやる事か
寢てもさめても今はただ一生懸命に勉強して、御恩返
しをしなければならぬと思ひます。氣が弛むと、兄
さんの教へて下さつたあの句を思ひ出して、私は一生
懸命で勉強してゐます。私は兄さんに比べたら本當に
幸福です。不平不満をいつてはすみません。

「人間は苦しい事に會はなければ立派なものになれな
い。」と、本當に本當にさうです。進んで苦しい事にあ
つて鍛へなければならぬ。一生懸命に勉強して私共
が成人したならば、地下に在すお父さんお母さんはき
つときつと喜んで下さる事を信じます。勵みませう。
勵まねばならない。希望に向つて進まねばなりません

ではお兄さん今日はこれで失禮します。暗くなりまし
たから、また。

明後年の御歸郷をお待ちしてゐます。どうぞおから
だを御大切に御勉強なさる事を祈ります。さやうなら

兄弟

本三 堀 賀代

それはこの四日のことだつた。今から學校に行かう
と思つて、部屋に鞆をさりに行き、そして今日は英語
はないし、明日は兄さんも行かれるのだから、この本
を渡してもう一章譯して貰はうか。こんな事頼んだら
復撥付けられるだらうよさうか。たのまうか、と頻に
考へてゐた時、ねむつて居る筈の兄が突然「おい今日
英語があるかい。と問はれた。はつとして顔の赤くな
るのを覺ながら「い、今日はいあります。御願
ひですから、もう一章譯して下さい」と口ごもりつ、
もいひはなつた。「おう本をおいて行け、昨日の處少し
ちがつてゐた」と心よく承諾された。私はほつとして
リーダーを兄の机の上に置いて、そのまゝ、部屋を出た

そして學校の途中、今までのことを繰返し／＼やはり兄さんは優しい、私を可愛がつて下さつて居るのだ。だから私の一等こまる英語をして下さる。と兄を思ひながら、何時か校門に來てゐた。

平素は私から「兄さん」と話かけても、知らぬ顔して居られることの多いこの兄さんも、折に觸れては親切にして下さる。私が一年生の時、まだ英語をならつて、始めての試験の時のことだつた。兄も試験のある頃なのに、まるつきり形にならない私に、單語をカードに書いて、つゞりをいせたり、發音を聞いたりして下さつたこともある。又或る時は葉書にこのやうにかいて下さつた。

學校の勉強も必要だ、が併しもつと大きい世の中を知る勉強は更に必要だ。お前が學校の成績がよいからつて、俺は餘り嬉しくはない。けれどもお前が小さい事にこだはらず、もつと氣が大きくなつたら、どんなに喜ぶだらうと。

これを受取つた私は泣いて兄に感謝した。
兄妹つてこんなものかしら。

— 0・0 —

人の子

本四 村田 幸子

私は或時一少から「人の子」と言ふ語を耳にし、そして、ほんとに何ともいへない淋しさを感ぜました。そして今更ながら「人の子」だといふ事を深く／＼意識したのでございます。その一瞬、直感的に自分は未だ人の子として價値のない、つまらぬ人間だと思ひました。

等しく天地の愛によつて、娑婆にあらはれたすべての物の中で、最も賢く、最も超越した「人の子」であるといふ事が今更のやうにたまらなく嬉しく有難く、胸にしみ込むと共に、あ、私は人の子たる道を正しくふんでゐない、や、もすればまがつた道にふみ入らうとしてゐると思へば、ほんとに泣きたくなつてしまひました。

併しまあなんと私は幸福なのでせう。私は人の子なのです。「人の子」……「人の子」……よく／＼味つて見る中に、測り知られない深刻な意のある事をほのかながら知る事が出來ます。もし私が一生懸命人の子とし

て此の世にあらしめた神の御心に添ふ様に心がけてやまなければ、現在よりはいさ、かなりとも、超越した私を見る事が出來ませう。かくして少しでも理想的な人間になつて、生きる事の本分を遺憾なく果して、私達に此の世といふ宿をあたへて下さつた造物者、それから私達に生命をあたへ給うた父母、また私達に生くべき道を示して光明へと眞直に歩ませて下さつた師の君、延いては私達の覺束ない旅を助けて、優しい道連れとなつて下さつたすべての人々、あらゆるものからの無限の愛の萬分の一にも報いなければならぬと思ひます。此の高い理想を標榜しつゝ、歩む傍、又々失敗する私を、私はつく／＼弱い人間だ、どうしてかう強くなれないのだらうと悩まげかすには居られません。

或日私は滔々と流れて行く水を眺めて、人の生命だつて、あの様に流れて止まないのだ。そして世に聖人偉人と崇められても、結局はあの川の流である。云ふ域を逃れないのだ。人皆の努力も水の面のうたかたに過ぎないのぢやないかしらと思つて、つまらないつまらない、同じ一生だ。どうしても此の命には限りがあるのだと何も彼も抛りたい様な氣も起しました。けれ

どけれど、其の恐しい惡魔のさ、やきに氣付いた私はいけない、いけないと強く強く叫ぶのでした。私共は日本人として榮ある國に生れ、尊い皇恩に浴しつゝ、はぐまれてゐるのではありませんか。

たとひ川の流は結局川の流であつても、私は其の濁流の中に、清い清い流れを造らなければなりません。

私はやはり良心の叫びを快く聞いて、もとの様に勵まうとする心に歸つて行くのでございます。

私は自己の良心を聞いた時ほど嬉しい事はございませぬ。そしてその一瞬、制し得ぬ微笑を洩しました。

お、その微笑その心のうるはしさ、それは無心に笑む赤子の様な無邪氣さと、尊さの表現ではなからうか。無我の瞬間に唇から自然とこぼれ出る微笑ではなからうか。あ、現在の私の心の中では、良心と惡魔とが互に闘争をして居ます。やがて私も「人の子」の言を聞いた時、何かしら喜ばしいと思ふ時も遠くはないと信じます。

「人の子」……「人の子」……お、何と私はしあはせなのでございませう。

— 0・0 —

弟

本四 金子 萩野

夏休で東京から歸省後陽子は弟の萬年筆のインクを借らうと、弟の机の前まで来た。中腰になりながら、つい文庫の蓋を取つて見た。見るともなく見ると、小さい本がある。取り出して見ると、宮本武蔵武者修行と金文字が入れてあつた。詩集は手もつけないらしくひもぎいた跡もなかつた。私は一種いふにいはれぬ苦笑を口邊に禁じ得なかつた。もうこんな物を讀むのか知らんと思ふと、自分の昔が思ひ出された。父の讀んではいけないといふのを、隠れ廻つて讀んだこともあつた。女學校に入學してからにはばつたりやめたが否止めるべく餘儀なくされたのだ。暇がないのと、面白くなくなつたのとで、そのかはり又別のものを讀み出した。恰度弟も此の私の時代を繰返して居るのだ。小學校時代はいゝとして中學校に入つたら、これでは駄目だと、私ははいはうかいふまいかと迷つたが、いはねば姉の責任がすまない様な氣がした。

夕食を食べて、弟の二階の書齋に行つて見ると、何

かがたひちして居た。あれだなと思ひながら、

「勇さん入つてもいいの」

「ううん、ちらかつて居るよ」

陽子は靜かに坐りながら、

「何をさがして居るの」

「ううん、何でもないんだよ」

「ではこれ御存知」

と袂から例の本を出して見せると、ばつと顔を赧くして、

「姉さん、持つて居たの」

「あまりこれに熱中すると學業がぬけるからね」

「……………」

陽子はいじらしくなつて、

「私も小さい時は好んでこれを讀んだものですがね」

かういつて弟を見ると、泣きさうになつて居るので、

「もうわかつたでせう」わかつたらいいですよ。」

陽子はなだめるやうにいつて本を弟にかへした。

債務化して

本四 石田 久子

たるものに與へられたる軌道を逸せず、使命の何物たるかを味ひつゝ、意味ある進行を持続しなくてはならない、與へられたる使命を自己の債務と化したる自覺ある杖をもつて。

姉に

本四 山本 直

なつかしのお姉様、

先日はどうも失禮いたしました お送り下さつたのにお禮も言はないで、歸つていつたのをお許し下さいませ。でもあのお姉様の様な先生がいらしたのですもの、恥しう御座いましたわ……。時とお姉様、なぜ下さつたレターを返せなんておつしやるのですか、私は悲しく御座いました。

お姉様がおつしやつたたびに、でもからうじて笑ひにまぎらしてゐたのですよ お姉様、やるせない私の心をどうぞお察し下さいませ 私はお姉様の返してくれとおつしやるお心の中が解せません

過去は葬りませう、けれど思ひ出だけは……。

宇宙間に存在を許されたるものは、夫々使命を與へられて居る。其の使命を果すべく各自は自己を犠牲として、與へられたる使命を自己の債務と化して解釋し常に自己は債務觀念の軌道を逸せず、着々と感謝しつつ、解決しつゝ、あるのではないか。お、この自覺こそ自己の務を果すために捨つべからざる杖ではあるまいか四季の景色についても、これを織り出す各自が自己の使命を、自己の債務として、使命を果しつゝ、ある道中の表現である。太陽は與へられたる一定點に端座して自己の使命を自覺し、地球は自轉しつゝ、公轉する複雑な使命を自覺し、又花鳥草木が與へられたる使命を自覺せるによつて、春殊有な季節を粧ひ、夏秋冬も亦此等によりて各特有な季節を表現して居る。され共この大舞臺に於て、一部のものたりとも使命の自覺なかりせば、如何に不揃な表現を示すであらう 然るに四季にかゝる見苦しき表現なきは、我々人類の師とすべきである

我々も生れ出づると同時に、天の使命を與へられて居る筈である。されば與へられたるものに感謝しつゝ、自己の使命を自己の債務と化して、道德的に生き、人

否、つかしかりしたのしい過去だけは、葬つたにしても思ひ出したいのです。だから、荷物の中からせめてもとよりだしたのです。ほんごに、嬉しかった一瞬間の出来事の秘めてあるレターなのです。そして詩集や、その他色々の戴いた物は、皆荷物になるというて悲しいながらも、お母様の言葉に従つて廣島において來ましたのです。けれど、あのつかしいレターだけは、だまつてもつて來ましたの。そして誰も觸れない様に大切に、にしまつておきました。悲しい時は出して読み、あの二年の時を……否、あの瞬間を思ひ出して總ての悩みと悲しみを打ち忘れたのですよ。それなのに、にそれまでも大切にしたもの、を私から奪はうとさるのですか、そして私の生活を味氣ない白い灰と化さうとさるのですか。そして再び私が悩みにもだねた時、その悶々を癒やすことの出来ない様になさるのですか。私の胸の狂亂するのを望んで下さるのでなかつたなら、どうぞ、あんなつらい事を許して下さいませ。

過去の思ひ出、それは美しくも尊いものでございまして。お姉様もそれは御存じだと思ひます。誰よりも

センチメンタルなお姉様なのでも、十分私の心の裡はお分りだと思ひます。

あの昔まだ私が二年の時、お姉様は真心からあの美しい詩想の芽を私に植ゐて下さいました。私はどんなに悦んでそれを育てたでせう。

又ある時は私をあの大草原の見渡される磯邊に誘ひ出し、黄昏の空の下で總べての悩みを慰めて下さいました。

私は唯夢心地に優しいお姉様の御胸に抱かれて、愛でられはぐくまれはげまされて來ました。

お姉様、私は、あの時の事を一度も忘れた事はご座いません。時の経過はあの事を葬つても、過去の思ひ出は葬ることは出来ないですもの。私はしごろもごろに過去に思ひに走せました、そしてあのなつかしかった憧れのことを、そしてあのピンク色のレターとを見くらべては苦悶から快樂の境界にと進んでゐたのですよ、そしてその樂園の中に酔入つてゐたのですよ。

それなのに私からそれを返せとおつしやるのですか。お姉様!! あまりに残虐だとはおぼしめされませぬか。あ、私は悲しい、あの美しい過去までも葬らなければ

ならないのでせうか。

夜は沈々と深み入ります。思ふも泪書くも泪總てが泪に變じてしまひました。

今時計の刻みはコツ／＼と進み、一時も二十分過ぎて居ります。お姉様は今宵悩んでいらつしやるのでせうか、それとも靜かにやすらかにやすんでいらつしやるのでせうか。

あ、こんなことを書いてお姉様のお心を痛めてしまふ私……もうやめませう。 さやうなら

斷片二篇

本四 山本 照

(一)

自動車が行く、オートバイが過ぎる、學生が通る労働者が行く。すべての人は生きるために醒醒してゐるのだ。生存競争の巷! 夕暮の○市……一日の働に疲れた體を吊革にぶら下げて歸つて行く人々を満載した電車はひききりなしに走る。この○市に住む人々はめまぐるしい活動をしてゐる。

のだ。生きるために、又己をよりよき位置におくために……。

電車内で、學生が老人に席を譲つて立つと、横にゐた職人風の人、がつかと重さうな腰を下す。

これは小さい事かも知れない。しかしそれに似た事實は、日々に、これだけ○市中に醸されて行く事か。

自動車が行く、オートバイが過ぎる、學生が通る、労働者が行く。生存競争の巷! 夕暮の○市……それはさもししい人生の縮圖なのかも知れない。

(二)

私は思はず振向いた何て可愛い。

といつて其の子は決して美しい衣をまとつてゐるでもなく、それ程容貌の綺麗な子でもない。

けれど正しく進む子、その爲に外見も身の苦痛も厭はない子なのである。裸足のまゝで、よれ／＼の帯をしめて、暑い日も寒い日も働いてゐる、私は彼より、いくつ年上かわからない、しかし彼の三分の一の働もない。

「小さき者よ、正しき者よ、強く生きておくれ」私は

泪がにぎんで見なくなつた。

あの純潔さうな瞳！ 私は弟の様な気がする。無神経な私にさへ、涙なくしては見られぬ姿をしてゐながら、彼はついぞ不平がましい顔をしてゐた事がない。いつも與へられた運命とちまふれになつて闘つてゐる。十に足りない位の年だもの、普通だつたら父母の慈愛に浸つて我儘を振舞ふ事なのに。小さいものよ、正しいものよ、我が愛する弟よ。彼は一人の寂しい新聞配達夫なのである。

秋の夜

本四 小池 幸子

入日の影もいつしか消れて、秋の夜は蒼茫として淋しく、四方の山々は夢の様に淡い姿をしてゐる。私は南向の縁に腰を掛けて、此の静かな夜に、秋の氣分を本當に味ふことが出来た。さつと吹き來つた風は、心地よく私の兩頬を撫でた。桓根にすだく蟲の音は、いやが上にも秋の氣分をそり立てゝゐる。

夜はいよいよ更けて遠寺の鐘の聲は、ごうごうんと森のかたに沈んで人跡は絶えた。四圍には露がしつとりと降りて木々の葉は重さうである。夜はいよいよ静かに、いよいよ更けて、今はたゞなんの響もなく静かに淋しく、山々の大木も野末の草葉も皆安らかに眠つてゐる。

月は皎々としていよく明るく下界を照してゐる。私は内に入つた。床に着いたのは十一時だ。鈴蟲の聲はまだやまない。

四つ葉

實一 齋藤 豊子

ふと手にした本の頁に、オリブ色に褪せた四つ葉のクローバがはさんである。私はそれを見た時、夏の日を思ひ出した。

樹蔭の戀しい眞夏、萌ゆる様な緑のクローバの岡に、友と夢中に四つ葉を探し求めたが、なか／＼みあたらないたまに四つ葉かと思ふと他の葉が重つてゐて三つ葉が四つ葉に見え、口惜しかつた様なこともある。

此の静かな天地に對しては、私のやうな平凡な人間でも、なんどなく詩や歌に心を寄する様になる。

松の梢からもれて來る月影は、自ら心も澄み渡る程清く澄み渡つてゐる。「明月や疊の上に松の影」の句を誰も思ひ出すであらう。

桐の葉蔭からは、星のまた、きがきら／＼と光つてゐる、廣い／＼大空は、白い月と小さい星で、他には何もなない。

草葉の上には、眞珠のやうな白露が月の光をあびながら、綺麗に列をなして宿つてゐる。

庭下駄をはいて、お庭を歩き始めた。お庭の植木や籬の黒い影は嵩よりも鮮かに地面にうつつてゐる。私が歩めば、黒い影法師は後から／＼ついて來る。突然向の菊畑の中から、金の鈴を振る様な澄みきつた聲で鈴蟲が夜の寂寞を破つて鳴きだした。なんと淋しい蟲の聲だらう。

折から梢をかき／＼と鳴した秋風は、涼しいよりもむしろ夜明けを今頃には寒い位だつた。おもはずを身ちぢめた。

ほんとうに秋は來たのだ／＼、勉強に好時機が……

ごうかして探さうと、目を見はり腰をかぢめて、片端からよく注意してゆく。ふとみあたつた時、私は思はず「四つ葉があつた」とさげんだ。そして私の心は喜びと満足にみたされた。

なよ／＼とした莖の先に、ハート形の四つ葉が行儀よくついて居るのは極めて稀であつた。

押葉にされてゐる四つ葉を見つめながら、私はちつと考へた。

四つ葉は幸福の葉だと聞いてゐたが、何の幸福も廻つては來ない。やつとさがしあて、嬉しさのあまり胸に抱きしめて微笑んだ時が、一番幸福であつたのだらう。

秋の夜

實一 三村 キク子

千草は露しげく、はてしない空は紺碧に晴れて太陽は美しく照る秋の時節は訪れた。私は今かうした美しい自然に抱かれて居る。けれども私の心はいつも故里に歸つて居るのであつた。私はいつも窓より限りない

空を見上げた。すると唯一つきら／＼と輝いてゐる星……、ちつと見詰めた私の胸は、いひ知れぬ物淋しさにみたされた。あ、故里が懐しくなつた。

故里。それは異郷にあるもの、心をどんなに苦しめる名なんぞでせう。秋は一入淋しさを感ぜしめる。去年迄は一緒に學んだ友も、今はいづこに在すやら。どこを見ても高い／＼山は皆私に敵意を表して居る。我が故里はあの山の向ふにあるのだけだ。

ふとどこからか、鈴の音をあざむく様な聲が聞えた。あ、あの蟲の命は短いのだ。今は出る丈の聲を出してしきりと鳴いて居る。けれどもそれが暮れゆく秋と共に聲も嘎れ、そして木枯の吹く頃はもう影も見えなくなるのだ。

あ、悲しい様な、物淋しい秋の夜。

濱の夕立

實一 大山トミ子

楽しい夏休みの一日濱に行つた。日本海のあらい波は、絶間なく渚邊に打寄せて居る。

空には一點の雲もなく、太陽はじり／＼と照りつけて居る。夕立が来ようとは思ひもよらぬ好い天氣であつた。沖の方には魚を釣る小船や遊船が見える。

海に入つたり、砂を掘つたりして遊んで居たが、ふと遙か彼方の夕立雲に氣がついた。さつきまで水泳をして居た人々も、沖の小船も急いで歸つて行く。雨を含んだ夕立雲は、どん／＼とこちらへひろがつて来る。早速海に入り、砂を落して渚邊を駆け出した。最寄の家の軒下にかけて込む間もなく、大粒の雨は、横さまに烈しく降りつけた。

烈しい雨は暫くして止み、雲の切間から薄日がさし始めた。暗い天地は本通り明るなつて、向ふ方には綺麗な虹が立つた。夕立の後の心地よさ。

栗拾ひ

實一 山村八重子

暑い／＼夏は去り、喧しい蟬の聲はいつしか松蟲や鈴蟲の音とかはり、はや秋となつた。吹く風も朝夕は肌にしみる。思ひ出されるのは栗拾ひである。

去年の秋であつた。私はお友達と妹と三人で栗拾ひに行かうと思つて、朝から御辨當持ちで家を出た。家を出る時母は「今日は九日だから栗御飲をたいて上げるから澤山拾つておいで」といはれました。

三人が家を出る時は、はや太陽は余程上つてゐた。そして秋空高く晴れ渡り朗かなよい日であつた。栗山にさしかゝると、この木にも／＼褐色になつた栗の實が、鋭い穂の中から落ちさうになつて居る。お友達があの高く聳えて居る山の下に澤山あるといはれたので、三人はその山に行つた。そこには枝も撓む程澤山なつて、下は昨夜の風で落ちた栗が一面だつたので、夢中になつて拾つた。

栗山の中には小さな溝があつて清らかな水が緩やかに流れて居る。

栗を拾ひながら山に上つた。其の山は大將陣といつて、絶頂から向うを眺めると、萩の全景が一目に見え、日本海の島々も繪にみる様に浮んでゐる。私達は景色のよいところを選び、眺めを恣にして晝の御辨當をいただいた。暫く休んでから復栗を拾つた。あまり栗拾ひに氣をとられてゐる中に、日も大分西の方へか

たむいたので歸ることにした。途中からお友達と分れて私は妹と一緒に急いで家に歸つた。そして早速袋から出して皆に見せると、澤山拾つたといつてほめられました。私も思つたより澤山拾へたので嬉しかった。母は早速栗御飯ができるといつて晚餐の用意をせられる。皆お湯に入つた後一同揃つて栗御飲をいただきながら、その日の楽しかつたこと等語り合つた。

暑中休暇中の一日

實二 品川祥子

ぐたり／＼とすずしやうい暑中休暇を、今年は妹と二人で、一日置きに臺所の手傳をすることにきめました。大抵きまつたやうに、午前五時頃起きる私が、其の日にかぎつて午前四時頃にふと眼が覺めたので、臺所の用事をすまし、廊下に立つて、何気なく天井を見るとき、多くの蜂がどまつて居るのに氣が附きました。何十匹もしれない蜂がしきりと巢を造つてゐます。小さな口でせつせとつ、いては、體をまけたりのぼしたり皆思ひ／＼のかたちをして居ました。それを見た

私は、あんな小さなものでさへ、定まつた自分の仕事に夢中になつてゐるのにと思ひ、直ぐ跣足になつて、いつもお晝すぎまでもかゝるくらの洗濯を晝前にしてしまひ、年後は宿題の羽織を仕立上げて、其の日はいつにないよい氣持ですぐことができました。そこで私はつく／＼と心の持ちやう一つで、何事でもできない事はないと思ひました。さうしていつもこの一日のやうな、氣になりたいものだと思ひました。

暴風

實二 大田 キシ子

栗、柿の實が我劣らじと成熟を競ふ頃、農夫は心籠めた稻の豐作を祈り居る此の頃、一週間も降續く大雨其の上押寄せる暴風に、あはれ青々とした稻田の上にやや黄味を帯びた、稻穂はいつしかかれがれと見るも痛ましいそのさま、そも農夫の心は如何ばかりぞ、折角の骨折は水の泡か。直接身に及ばさぬ自分ながら、思はず歎息せざるを得ない。
ああ暴風。何處から來た。何物が與へた其の力は。

小さい草花は地に押倒れ、見上げる大木の幹もうち折れ、一家擧つての和樂の世界までも、恐怖の底に落す惡魔の暴風。
心地よい秋の日も、此の暴風を見ては、何處もなく物淋しい。思つて故里の空を仰ぐ時、憂の胸に迫るのも此の暴風故。

秋の夜の雨

實二 茂刈 菊代

靜かに秋は訪れてまゐりました。しと／＼と、降りしきる雨にも一入の靜寂を誘ふ様に。
なんて今夜は格別に靜な寂しい夜でせう。私はひし／＼と迫り来る淋しさを感ぜないではゐられませんが、永遠にさめぬ眠の旅に立たれし母上の姿を、今宵の様な淋しい夜には、思ひ出さないのでゐられませうか。私は思はず架空に描いた或物をつかみました。そして手を握りしめました。お、懐しの母上よ、亡き母様よ。叫ばずにはゐられませんでした。あゝ、あの荒涼たる墓地の母上も、秋の夜蟲の鳴く聲を心ゆく迄聞いて居

られるでせう。むりに眠を閉ぢても心は冴々て寝もやられず舍友のすや／＼と、寝てゐられるのも、にくさげに思ひました。

あたりは一つの音もしない。夜半の空氣とふるはして一しきり終列車の汽笛が響いて過ぎました。その後にはただほ／＼と、雨垂の音のみが續いてゐます。私は何時迄も／＼胸に手をあて、聞き入りました。

黄昏の五分間

實二 山本 絹子

空を見つめて居ると何となく物淋しく、叢にすだく多くの虫の音も、早や秋が來たとつけて居る。折りしも表通りの騒がしさに、手にせし讀書を投げ捨て、出で見ると、一臺の自動車が賑々しい、しかも騒々しい音をたて、廣告紙を雨蔽の様にまきさつて一目散に走つて行く。其の跡を小犬が吠えながら、まげじと追つて行く。童等は、我がちにかみ取りして嬉々として戯れて居る。と、母親らしい人の呼ぶ聲に引きつけられて、一人が駆け出せば、續いてばら／＼と後をも見ずに行つて仕舞つた。

取り残されし廣告紙は黄昏の風にひら／＼と散つて行くのみだ。

星輝く宵

實二 河村美登里

外には銀砂のやうな小さな星が、ぎら／＼と輝いてゐた或晩の事であつた。眠りに就かうと思つてゐた私はつと立ち上つて障子をあけて空を仰いだ。私の胸は去年なくなつた母の事で一杯であつた。あゝ、去年の夏は、今夜のやうな冴々とした晩には、きつと母上と共に外に出で、この庭で月見をしたにと思へば、胸がつまらぬやうな心持がした。私は暫くは胸に手を當て、考に耽つて居たが、涼しい風に誘はれて外に出た。そして鳥の廻りを散歩した。去年まではいつも二つあつた影が今年は私ひとりになつた。しきりに鳴いてゐる虫に私は慰められてゐるやうな心持がしたので、いつまでも／＼も聴き入つてゐた。ふと池の中を見ると暗くて金魚も鯉も見えない、けれど僅かに星影のみが池の水の面にうつてゐた。折りふし冴々とした夜空を夜鳥が二三羽なきながら通つて行つた。

立田姫を迎へて

實二 津田幸子

「立田姫は清淑なり、鼻高く口元りしく眼涼しく顔少し長く、体や、瘦せたるにあらざるか。立田姫は爽快なり、秋の初風にこちよきが如し、月清し、これ立田姫の姿なり」と、これ大町桂月先生は、春を司る佐保姫と、相對比せられたりしなり。
残暑漸くをさまりて清風徐に涼を送り、天地の自然は今立田姫を迎へたり。底知れぬ瑠璃色を想像せしむる空は、日毎に澄みゆきて、紺碧の空より鮮なる光は投げ出されぬ。即ち秋の立田姫の威嚴を發揮せしが如くに、叢中より出づる聲、さては風の音、はた月光それ等の悉くが眼に耳に我等に快感を與ふ、けに筆執ればすべて盡となり、詩歌ともなるいづれも秋の風趣ならぬはなし。
古人は言へり、秋は讀書の時なりと、お、宜なるかな。澄みゆく空に心を求め、染めなす色を彩に織り、落葉くぐる下水を力として、あらん限り我が心身を試しみまほしとこそ願ふなれ。

かく思ひ定めて見上ぐれば空はいよよすみにすみ、委床しき立田姫の一しほに神々しくぞ思はれたる。

初秋の黄昏

實二 君谷藤子

風の音も月の色も秋らしい感がして来るやうになつた。草叢にすだく蟲の音にも、何となく身にあはれしみるやうな心淋しい夕暮である。私は運動を終へて室に歸つて見ると誰か居られない。唯獨寄宿舎の窓にもたれて外を眺めてゐた。
空は墨を流したるが如くにて氣味悪い。二三日前から暴風雨で、阿武川は大變な増水である。室にはまだ誰も歸られない。唯淡暗い電燈のみが部屋中に漂うて居る計りである。如何に初秋とはいへ、何だか冷たい風だ。私は思はず襟をかき合せた。すぐ下の中庭の草蔭よりは、涼しさうな蟲の啼く音が聞えて来る。やつぱり是も秋の景物だ、あたりの物皆すべてが、思い定めて自習の出来る用意をした。相變らず窓よりは頻に心地よい風が吹渡つて居る。頭がすうとする眼を閉ぢてゐると忘れられぬ、懐かしい古里の事、さては弟妹の事など走馬燈のやうに現はれて、遠いあたりを次から次へと追つて行くのであつた。
「何考へて」と飛び込んでいらつしやつた室の方々に今まで書いて居た夢は破られた。嗚呼樂しかつたのにさてはいつの間にも自習の鐘は鳴つたであらうか。

童謠詩

迷ひ鳥

本一 中村千枝

ち、ち、ち、ち、空の鳥、
何時まで鳴くの、
迷子になつた、小鳥さん、
わたしが教へて、あげませう、
多分父さん、母さんを、
さがし求めて、行くのでせう。
赤い夕日を、身に浴びた
哀れな姿を、眺めつゝ、
暫し涙に、くれました。
私達の、父母は
何時も子供の、傍に居て、
お護りなさる、嬉しさよ。
思へば空の、あの鳥は
父母戀うて、鳴くのでせう。
ち、ち、ち、ち、鳴く、
お星が一つ、見えました。

赤いおはし

本二 落合八重子

金のお茶碗父様の、
銀のお皿は母様の、
赤いおはしは坊のです。
赤いおはしをもらつた時、
坊やはほんとにうれしさう。
赤いおはしを見た時に、
坊はにつこり笑ひます。
赤いおはしで食べた時、
坊やはこつくりねむります。

かくれんぼ

本二 落合八重子

ジャンケンポンよ、
かくれんぼ。
鬼は一人で淋しさう。
百かぞへて目をあけりや、
たあれもゐないで、
家ばかり。
二百かぞへて
目をあけりや、
家々に火がともつた。

三百かぞへて
目をあけりや、
あたりはまつくらで、
空には星が出た。
鬼は淋しくて
シタ／＼泣き出した。

虫の聲

本二 友永マサ子

月の照る夜も、
闇の夜も、
ちんちろりん／＼と
鳴きつゞけてゐる。
せめて聲の囁れぬ間に、
うたへるだけうたへ、
なけるだけなけ。
はかない命を悲しむやうな
秋の夜になく虫の聲。

虹

本二 守田トミ子

かざりもあらぬ大空に、
紅緑織る橋の
おこり所を見んものと

行けど行けども果てしなき
北より南の虹のはし。

つゆ草

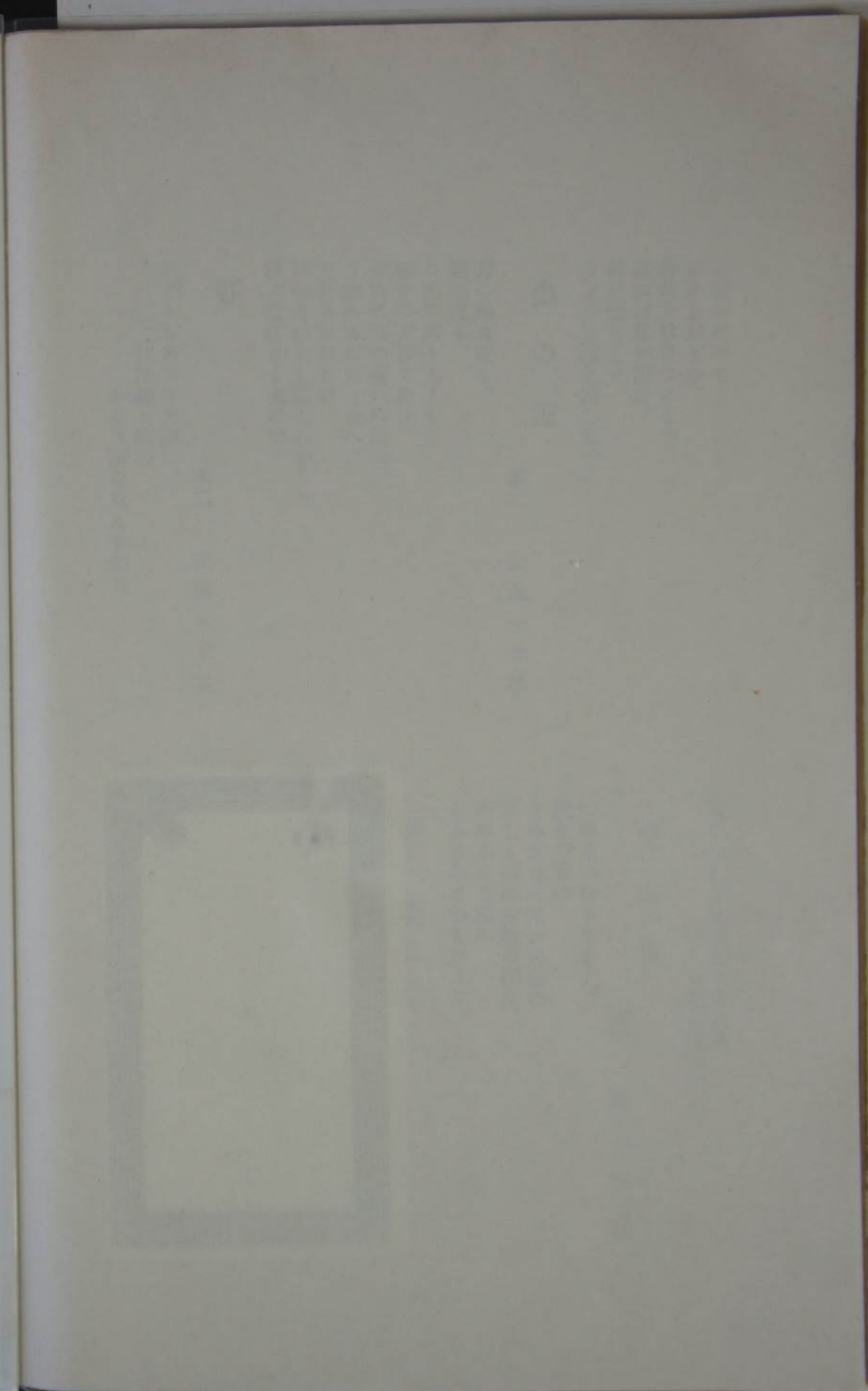
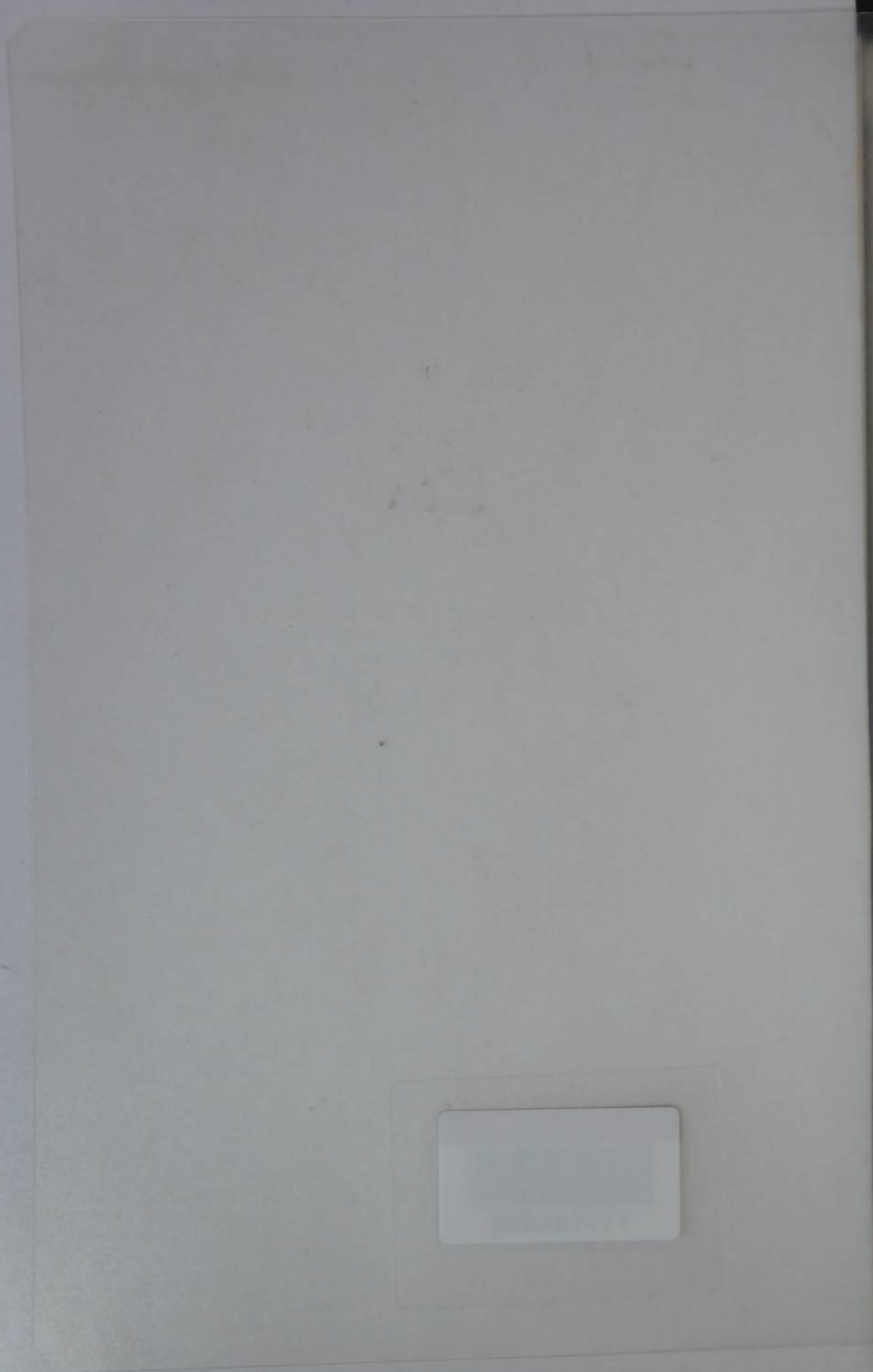
本三 岡本芳江

つゆ草のむらさき！。
清き少女の
さめざめと泣いた後の
涼しくはれた瞳の様な、
その小さな花に
しみじみとおもひ入る。

秋の夜に

本三 長谷富美

青き尾を引きて、
流れし星の影遠く、
やるせなき寂しさに、
ひく／＼うなだれ
家路たどれば虫の聲……。
佗しさに
涙さしぐみ、
ふとも袂をまさぐれば、
あゝ！あはれ、
いつ見失ひしとも



萩市立萩図書館



111524898